ISSN 2186-5752

子育て支援研究センター年報

第13号　2023

宇都宮共和大学　子育て支援研究センター

宇都宮共和大学の地域社会連携・地域貢献ポリシー

宇都宮共和大学は、須賀学園の教育理念を踏まえ、大学の目的として、「時代の潮流と社会の要請を見極め，常に知識と能力を向上させるとともに大学を地域社会における知的交流の場とし，さらに経済，教育，文化の振興と社会の向上に貢献できる人材を育成することを目的とする」（学則第１条）と定めている。

宇都宮共和大学は、栃木県内に３つのキャンパスと活動拠点を有しており、学園の 100 年を超える伝統を生かしながら、絶えず「まち」、「ひと」に視点を当て栃木県央を中心とする北関東圏の「地域社会」の経済、教育、文化の向上と発展のために貢献することを目的とする大学である。

この目的を達成するために、本学は、「社会連携・社会貢献に関する方針」を次の通り定める。

１．目的と使命

本学は、地域社会と連携し、時代の要請に応え、将来地元で地域社会の発展に貢献し、活躍できる人材を養成することに努める。

２．産学官の連携

本学は、企業、自治体、各種団体・組織、市民等と積極的に連携し、地域社会の発展に貢献できるように努める。

３．地域活動の拠点

本学は、本学の有する教育・研究資源を積極的に地域社会へ提供し、地域の教育・文化活動の拠点となるよう努める。

４．地域貢献活動への支援

本学は、教職員・学生が、研究・教育の成果を地域社会に発信する活動及び教職員・学生が地域の活動や行政施策の助言者等として参画することを積極的に支援する。教職員は、「宇都宮共和大学コンプライアンス規程」の重要性を認識し、高い倫理観を持って行動する。

（平成 29 年 11 月 1 日制定）

宇都宮共和大学

子育て支援研究センター年報　第13号　2023

目　　次

Ⅰ．子育て支援研究センター2022年度公開講座報告 1

Ⅱ．地域の就学前施設との交流を取り入れた保育者養成教育実践報告
市川　　舞・桂木　奈巳　3

Ⅲ．Ｔｉｎｙ（障がいのある子どもと家族の支援）実践報告〈12〉　土沢　　薫　11

Ⅳ．「親子遊びの会」－子育てネットワークづくりプロジェクト－実践報告
今村　麻子　29

Ⅴ．自然遊びの会・行事実践報告～親子ふれあいネイチャー事業～　桂木　奈巳　35

Ⅵ．地域産学官連携活動報告 38
1．大学地域連携活動支援事業報告 38
2．大学コンソーシアムとちぎ第19回学生＆企業研究発表報告 47
3．宇都宮市環境学習センター事業報告 51
4．宇都宮共和大学・宇都宮短期大学×ミナテラスとちぎ
「大学連携親子ワークショッププログラム」実施報告 59

Ⅶ．宇都宮共和大学子ども生活学部　卒業研究 66
1．2022年度卒業研究一覧 66
2．全国保育士養成協議会関東ブロック協議会　第36回学生研究発表報告 68

資　　料

Ⅰ．2022年度子育て支援研究センター事業報告 73

Ⅱ．2022年度専任教員の社会貢献活動（子ども生活学部） 77

Ⅲ．宇都宮共和大学子育て支援研究センター規程 82

Ⅳ．宇都宮共和大学客員研究員に関する要領 84

Ⅰ．子育て支援研究センター2022年度公開講座報告

公開講座の概要

１．目的：幼稚園教諭・保育士や子どもの教育・保育に関わる仕事に従事している学校教職員・行政職員・一般市民を対象に、その専門的知識や技術を研究し、あわせて大学教員と交流することを目的として、連続講座を開講する。

２．2022年度テーマ：乳幼児期の保育の質の重要性

３．場所：宇都宮共和大学・宇都宮短期大学　長坂キャンパス　５号館（第37回）
オンライン開催（第38回）

４．日程と講座内容

第37回　講演会 ６月25日（土） 13：30～15：30	あそぼう！－「遊ぼうカー」の実践から 千葉明徳短期大学特任教授 深谷　ベルタ 氏
第38回　講演会 10月29日（土） 13：30～15：30	脳の発達を聞いてみよう　０歳からの幼児教育 京都大学大学院教育学研究科教授 明和　政子 氏

＜第37回＞

講師：深谷　ベルタ 氏

1954年ハンガリー生まれ。国立のEotvos Lorand Tudomanyegyetem／Eotvos Lorand University（通称“ブタペスト大学”）文学部心理学科卒（1979年、心理学修士）。1979年８月に日本人夫と来日、永住者となる。1988年から財団法人児童手当協会、青山「子どもの城」（東京都）保育研究開発部に就職。約20年間、保育者として働く。2007年から千葉明徳短期大学保育創造学科教授。「子どもと文化」「造形表現」等を担当。2013年秋以降、千葉県内で造形あそびを保育現場に提供する独自のプロジェクト「あそぼうカー」の活動を開始。日本の保育の現状と未来、表現教育に特に強い関心がある。

＜第38回＞

講師：明和　政子 氏

文部科学省科学技術学術審議会委員、日本学術会議連携会員。

ヒトとヒト以外の霊長類の心のはたらきを胎児期から比較し、ヒト特有の心の発達とその進化的基盤を明らかにする「比較認知発達科学」という分野を世界にさきがけて開拓した。著書に『ヒ

トの発達の謎を解く―胎児期から人類の未来まで（ちくま新書）』『まねが育むヒトの心（岩波ジュニア新書）』『心が芽ばえるとき（NTT出版）』『なぜ「まね」をするのか（河出書房新社）』など多数。NHKスペシャル『ママたちが非常事態！？　最新科学で迫るニッポンの子育て１・２（2016年放送）』『ニッポンの家族が非常事態！？　～第１集わが子がキレる本当のワケ～（2017年放送）』『ジェンダーサイエンス 男X女　性差の真実（2021年放送）等の監修、出演により、現代社会に生きるヒトが抱える問題を最新科学の知見から理解する活動にも力を注いでいる。

Ⅱ．地域の就学前施設との交流を取り入れた保育者養成教育実践報告

子ども生活学部　准教授　市　川　　舞
教　授　桂　木　奈　巳

１　はじめに

子ども生活学部の開設以来、学生が子どもを身近に感じて学ぶことができる学習環境の整備を意図して、地域の就学前施設との交流保育を授業に位置づけ、実践してきた。

幼稚園教諭一種免許状および保育士資格取得に係る学外実習に加えて、学内において授業を通して子どもと出会う本取り組みは、本学の保育者養成教育の特色の１つでもある。複数科目間で連携して＜指導計画の立案―実践―反省・評価＞を行い、子ども理解はもちろんのこと、子どもの生活に身近な環境や保育の過程の理解を深め、子どもの健康・安全を守りながら子どもの発達を支える保育者としての基本姿勢を培う機会として活用している。

大学教員にとっては、授業を通して交流保育をサポートしたり参観したりすることによって、学生の実態や課題をとらえ、自身の授業実践やカリキュラムを振り返る機会となっている。

さらに連携園にとっては、保育を地域に開き、本学の教育資源 - 自然豊かな森やグランド、広いアリーナ、学生・教員などの人材等 - を活かすことで子どもの経験をより豊かにする機会として活用いただいている。

本稿では、令和４年度の取り組みの概要について報告する。

２　令和４年度の交流保育計画

令和４年度の交流保育の計画を表１に示す。

今年度は宇都宮市内の４園と連携し、年間計10回の交流保育を計画したところ、実施は予定交流回数の半数である５回に留まり、５回が中止となった。中止理由は、雨天や降雪および低温などの悪天候、また、新型コロナウイルス感染症拡大防止によるものであった。中止回については、連携園と協議し延期日程等も検討したものの、連携園・大学双方の学事暦等の関係で調整がつかず中止となった。

そのため、２年生は２回中２回、１年生は６回中３回、交流保育を経験できなかったが、その補完として当該時間は「教材研究」に充てた。

表１　令和４（2022）年度　交流保育計画

年　度　当　初　の　計　画	実　　際
認定みどりこども園 第１回交流保育　2022.６.15（水）　１－２限　年長児50名 テ ー マ：春の自然に親しむ 関連授業：保育内容環境、 保育内容総合演習Ⅱ、保育内容表現（２年） 主 担 当：桂木	中止（雨天のため）
第２回交流保育　2023.１.27（金）　年長児50名 テ ー マ：一人でもみんなでも楽しい伝承遊び 関連授業：保育内容総合演習Ⅲ（３年） 主 担 当：市川、桂木、月橋、星	計画通り実施 子ども生活学部３年生48名
認定しらゆりこども園 第１回交流保育　2022.６.８（水）　年少児40名 第２回交流保育　2022.６.９（木）　年少児40名 テ ー マ：春の自然に親しむ 関連授業：フィールドワークⅠ、 保育内容総合演習Ⅰ、保育原理（１年） 主 担 当：桂木、市川	計画通り実施 子ども生活学部１年生46名
第３回交流保育　2022年12月５日（月）　年少児40名 第４回交流保育　2022年12月６日（火）　年少児40名 テ ー マ：秋の自然に親しむ 関連授業：フィールドワークⅠ、 保育内容総合演習Ⅰ、保育内容総論（１年） 担 当 者：桂木、市川	中止 （新型コロナウイルス感染症拡大防止のため）
第５回交流保育　2023年１月18日（水）　年少児40名 第６回交流保育　2023年１月25日（水）　年少児40名 テ ー マ：冬の自然に親しむ 関連授業：フィールドワークⅠ、保育内容総合演習Ⅰ（１年） 担 当 者：桂木、市川	計画通り実施 子ども生活学部１年生46名 中止（悪天候のため）
さくら認定こども園 第１回交流保育　2022年６月７日（火）　年長37名 テ ー マ：春の自然に親しむ 関連授業：保育内容環境（２年生） 担 当 者：桂木	中止 （新型コロナウイルス感染症拡大防止）
つるた保育園 第１回交流保育　2023年１月11日（水）　５歳児30名 テ ー マ：いろいろな遊びを楽しもう 関連授業：保育内容総合演習Ⅲ（３年） 担 当 者：市川、桂木、月橋、星	計画通り実施 子ども生活学部３年生53名

３　認定みどりこども園　交流保育

１）日　時　2023年１月27日（金）　１－２限

２）場　所　長坂キャンパス　グランド・アリーナ

３）参加者　認定みどりこども園　年長児50名、引率　保育教諭４名
　　子ども生活学部３年生53名

４）テーマ　一人でもみんなでも楽しい伝承遊び

５）活動の流れ

時間	子どもの活動	学生の動き	備考
９：10		・学生集合、出席確認 活動の留意事項の確認、環境構成	・身支度確認 ・環境構成
	・来校		・トイレに踏み台
10：30	（10：10園バス発予定） ・アリーナ前に到着 ・遊びの紹介を受ける ・好きな遊びに取り組む （凧、縄、ごむとび ひっくり返しゲーム、 とんとん相撲、こま、 わらべ歌遊び、紙とんぼ）	・子どもを迎える。 ・遊びの紹介をする ・各自のコーナーで子どもを迎える ▶子どもの意欲や主体性を大切に、一緒に遊ぶ、見守るなど様々な関わり方を試みる ▶発達過程に配慮し、子どもの実態に応じて挑戦できるよう関わる	・入口に消毒設置 ・安全には十分に留意し、体調不良やケガ等は必ず保育者に報告する ・子どもの様子に留意し、適宜水分補給する
11：50	・集まり ・保育実習室に移動	・おわりの挨拶	・お手洗いに行きたい子どもはアリーナに誘導。保育教諭に必ず報告。
12：00	・昼食	・移動を見守る	
13：00	・帰園		・保育実習室は暖房をつけておく

６）活動の様子

大学生の援助に支えられながら、一人一人の子どもが「自分なりの挑戦」や「仲間との挑戦」を楽しんで活動した。

自分だけの凧つくり

とんとん相撲で勝負！

コマ回し

ひっくりかえしゲーム

だるまさんがころんだ！

上下どっち？真ん中もあるよーごむとびー

輪っかをねらってー紙とんぼー

二人跳びに挑戦ーなわー

４　認定しらゆりこども園　交流保育

４－１　第１～２回交流保育

１）日　時　2022年６月８日（水）、９日（木）　１－２限

２）場　所　長坂キャンパス　子どもの森

３）参加者　認定しらゆりこども園　年少児91名、引率　保育教諭９名
　　子ども生活学部１年生46名

４）テーマ　春の自然に親しむ

５）活動の流れ

時間	子どもの活動	学生の動き	備考
９：10		・学生集合、出席確認 活動の留意事項の確認、環境整備	・身支度確認 ・トイレに踏み台 ・森の入口に消毒設置
	○来校（10：10園バス発予定）		・安全には十分に留意し、体調不良やケガ等は必ず保育者に報告する
10：30	・学生駐車場に到着	・見守りを中心としながら、子どもの活動を観察する。	
	○森の探検（到着順に順次） ・森を探索し、発見や見立てなどを楽しんだり、体を動かしたりしながら、森の自然に親しむ	（・立ち入り禁止区域の入り口 ・倒木など安全面の配慮が必要な場） ・子どもが話しかけてきた際には応じる。 ・子どもの発見や疑問を受け止めつつ、子どもに返す関わりとなるように留意する。	・子どもの様子に留意し、適宜水分補給する ・お手洗いに行きたい子どもはアリーナに誘導。保育教諭に必ず報告。
11：40	○帰園		

６）活動の様子

　はじめて訪れる「子どもの森」。活動開始直後は緊張の面持ちだったが、歩みを進めるうちに足の裏の土の感触や森のにおい、樹木がつくる木洩れ日など五感で森を感じ、心を動かして探索を楽しむ子どもの姿があった。学生が一人一人の子どもの発見やつぶやきを丁寧に受け止めることで、子どもは安心して自己表現し、満足感を味わって活動していた。

カナヘビみつけた！

葉っぱのブーケ

４－２　第５回交流保育

１）日　時　2023年１月18日（水）

２）場　所　長坂キャンパス　グランド

３）参加者　認定しらゆりこども園　年少児40名

４）テーマ　凧あげ

５）活動の流れ

時間	子どもの活動	学生の動き	備考
９：10		・学生集合、出席確認 活動の留意事項の確認、環境構成	・身支度確認 ・トイレに踏み台
	・来校		・入口に消毒設置
10：30	（10：10園バス発） ・アリーナ前到着 ・凧作り ・凧あげ	・子どもを迎える。 ・保育教諭の指示の下、凧作りを援助する ・子どもとグラウンドで遊ぶ ▶子どもの意欲や主体性を大切に、一緒に遊ぶ、見守るなど様々な関わり方を試みる ▶発達過程に配慮し、子どもの実態に応じて挑戦できるよう関わる ＊必要応じて、縄・ボール・フープ等用意	・安全には十分に留意し、体調不良やケガ等は必ず保育者に報告する ・子どもの様子に留意し、適宜水分補給する ・お手洗いに行きたい子どもはアリーナに誘導。保育教諭に必ず報告。
11：40	・帰園	・帰園を見守る	

６）活動の様子

６月以来、２回目の来校。「凧をつくって、遊ぶ」活動の見通しと期待感を持って来校した。テープを貼る、紐を結ぶなどの工程を、学生に支えられながら「自分だけの凧」を作り、寒さに負けず、グランドを思い切り走りながら凧あげを楽しむ姿があった。言葉のやりとりや他児との関わりが豊かになった子どもの姿に、学生は「半年の成長がすごい」と幼児期の発達のダイナミクスを実感していた。

学生と一緒に凧つくり

グランドを思いきり走って

5　つるた保育園　交流保育

1）日　時　2023年１月11日（水）

2）場　所　長坂キャンパス　グランド

3）参加者　つるた保育園　５歳児30名　引率　保育士４名
　　子ども生活学部３年生53名

4）テーマ　冬の遊びを楽しむ

5）活動の流れ

時間	子どもの活動	学生の動き	備考
9：10		・学生集合、出席確認 活動の留意事項の確認、環境構成	・身支度確認
9：30	・来校 （10：10園バス発予定） ・アリーナ前に到着 ・好きな遊びに取り組む （凧、縄、ごむとび ひっくり返しゲーム、 とんとん相撲、こま、 わらべ歌遊び、紙とんぼ）	・子どもを迎える。 ・各自のコーナーで子どもを迎える ▶子どもの意欲や主体性を大切に、一緒に遊ぶ、見守るなど様々な関わり方を試みる ▶発達過程に配慮し、子どもの実態に応じて挑戦できるよう関わる	・アリーナ入口に消毒設置 ・安全には十分に留意し、体調不良やケガ等は必ず保育者に報告する ・子どもの様子に留意し、適宜水分補給する
10：40 11：40	・帰園	・学生との交流終了、２限目授業へ ※学生が遊んでいるところへ自然な形で交流できるようにする ※２限は保育指導法Ⅰの授業があるため、教材は、子どもに貸す／プレゼントする形で引き継ぐ。 ※２限終了後、片付け	・お手洗いに行きたい子どもはアリーナに誘導。保育者に必ず報告。

6）活動の様子

色々な技に挑戦－ゴム跳び－

いろいろなコマ

子どもたちは、園で自作した「凧」を持参して来校した。ひとしきり凧揚げを楽しんだ後、学生が用意した遊び環境に興味をもち、「これやっていい？」と新たな環境に関わりを広げ、新しい遊びに挑戦する姿があった。

学生の援助のもと30分程遊んだ後、学生は次の授業に出席するため不在になった。その際、「（学生が用意した教材で）遊んでいていいよ」と子どもたちに一声かけていくことにした。すると、学生が遊びから抜けた一瞬、遊びが停滞したものの、学生と楽しんだ遊びを他児に伝えたり自分たちでアレンジして遊びを展開したりするなど、学生と一緒に楽しんだ遊びを「自分たちの遊び」として主体的に展開しようとする子どもの姿がみられた。

６　おわりに

今年度は、悪天候等により計画の半数にあたる５回の交流保育が中止となった。

中止となった時間は「教材研究」に充てた。子どもが環境と出会うことで、どのような経験をするのか学生が追体験することで子どもの理解を深めることを意図したものである。学生は教材研究の他、多くの授業において事例や映像の中の「子ども」と出会い、学ぶ。しかし、実際に「子ども」と出会い、活動を共にし、心を響かせ合いながら子どもを理解する機会に勝るものはない。その意味で、本実践の意義は非常に大きく、今年度得られなかった経験を補っていくことを次年度以降の課題としたい。

とんとん相撲で対決

材料を組み合わせて、自分なりにつくる

学生が行っていた役割を子どもが担う
ひっくり返しゲーム

Ⅲ．Ｔｉｎｙ（障がいのある子どもと家族の支援）実践報告〈12〉

子ども生活学部　教授　土　沢　　薫

１．Ｔｉｎｙらしさを大切に、新しい形を模索

Ｔｉｎｙの活動は、11年目を迎えた。これまで遊びを通じて障がいの有無にかかわらず子どもたちの発達支援活動を継続してきたことが認められ、2022年度明け早々の４月１日付で宇都宮市から市民憲章賞をいただき（写真１）、晴れ晴れしいスタートとなった。市民憲章賞の詳細については、受賞の知らせが届いた昨年度末段階で執筆した前回の実践報告〈11〉でお伝えしたとおりである。

写真１．市民憲章賞を喜ぶＴｉｎｙ隊メンバー

しかし、喜んでばかりはいられず、先が見えない引き続くコロナ禍により、新たな年度も、対面で行うＴｉｎｙらしい活動の継続にあたり困難さが継続する状況でのスタートとなった。感染症対策による自粛期間が長期化し、２年以上にわたり対面での活動ができなかったことから、学生サークルＴｉｎｙ隊は、対面での活動経験者が全員卒業、現役学生メンバーの経験は、オンラインコンサートやSNSによる情報発信など、一方向的な活動内容にとどまる状況であった。学生たちと共に皆で活動のイメージを共有したり、Ｔｉｎｙでの活動が、障がいのある子どもも含めた実際の子どもたちや地域の方々にどのように貢献できているのかを実感したりができにくくなっていることが懸念された。

そのような中、４月には、フレッシュでやる気ある新入生が活動メンバーに加わり、「今年度こそ何とか対面での活動を実現したい！」との思いが高まると共に、対面での具体的活動の実施方法を模索した。

そして、これまで培ってきたＴｉｎｙ活動の基本を大切にしながら、これまで通りにはできない状況であっても対面実践が可能な活動を実現させる方向で、今年度の活動の具体的な計画を立案した。大切にしたのは、以下の３点である。

１）コロナ禍であっても、参加者（学生やスタッフも含め）全員が安心して参加し楽しめる活動であること

２）感染症リスクを想定し、無理なく対応できる範囲で現実的に考えること

３）こんな時だからこそ、Ｔｉｎｙらしい温かさ、楽しさ、安心感、ワクワク感を失わずに、皆で共に成長し合える内容にすること

ホームページURL：
https://www.tinytiny.info/

図１．シンボルキャラTinyくん

Ｔｉｎｙでは、活動開始当初からシンボルキャラクターである「Tinyくん」（図１）を使用し、一人ひとりが光り輝く存在として、大人も子どもも自分らしく共に楽しく育ち合うことのできる活動を心掛けてきた。そして今、世界的なパンデミックの発生から感染症が収まらない状況下で、不安や疲れが募りつながりが絶たれがちな状況だからこそ、これまで取り組んできた対面での楽しく主体的で相互的な触れ合い体

験を、Ｔｉｎｙらしい「ちっちゃな」活動から再開していくことを心がけることにした。感染症の状況に応じ中止も想定しながら、動き、立ち止まり、再び動いた１年だった。

できる限り、安心・安全に配慮した実現可能な形を模索しつつ、実施に向けた新たな枠組みの工夫や学生たちとともにアイディアを練った今年度の具体的な活動内容について、以下に報告する。

２．ふれあいＴｉｎｙ隊

（１）「ふれあいＴｉｎｙ隊」の誕生！

まず、今年度も状況によっては対面活動が十分に行えないことも想定し、これまでのSNS等での発信は引き続き行った。写真２は、動画配信やSNSで活躍中の「たいにーちゃん」が、図１で紹介したシンボルキャラクター「Tinyくん」を抱えてポーズをとっているところである。学生グループが中心になって、FacebookやTwitterなどを通じ手軽な遊びやＴｉｎｙ隊の活動を地道に発信している。

写真２．たいにーちゃん

コロナ禍であっても可能な情報発信等のSNS活動は継続しつつ、どんな状況であろうと止まることない子どもたちの成長に思いを馳せ、現状においてＴｉｎｙが子どもたちや地域に寄り添いながらできることは何かを少しずつ模索しながら、情報を集めつつ手探りで活動を継続した。

そのような中で、念願の集合対面型活動をリスタートさせる新たな形として誕生したのが「ふれあいＴｉｎｙ隊」である。「ふれあいＴｉｎｙ隊」は、従来Ｔｉｎｙ活動として継続的に実施してきた「障害のある子どもとその家族の集い」をもとに、感染予防対策を踏まえ参加者を限定し事後対応も可能な形で、状況に合わせて柔軟に対応できるようにしつつ、できる限り対面での楽しい内容を考えたＴｉｎｙの新しい取り組みである。その実践の様子について以下に示す。

（２）第１回ふれあいＴｉｎｙ隊の実践

初めてのふれあいＴｉｎｙ隊は、近隣自治体のこども発達支援センターと協力し、特定の参加者に限定した形で、じっくりと地域の障がいのある子ども達や支援者との関わりを深める活動を展開した。活動を通し参加者に喜んでいただくと共に、学生の体験的学びのよい機会となった。

●活動の概略

１．日　　時：７月23日（土）14時00分～15時00分
２．場　　所：宇都宮共和大学５号館４階　保育実習室
３．内　　容：パネルシアター、制作活動、楽器活動、身体活動、音楽鑑賞等を通しての交流
４．参 加 者：子ども発達支援・放課後等デイサービスＡ施設の利用児：９名（８歳～10歳）
　　引率施設職員：６名（主任保育者他５名）
５．参加学生：子ども生活学部４年生１名、３年生３名、２年生２名、１年生４名
　　宇都宮短大音楽科２年生１名、１年生１名

●実施までの準備

コロナ禍でのふれあい活動における安全対策や、対応に不慣れな学生たちと発達特性のある子どもたち一人ひとりの出会いがより良いものになり、楽しい時間となるように、参加対象の発達支援Ａ施設との事前打合せを丁寧に行った。

特に、対象を限定したことで、子どもたち一人ひとりの発達特性や対応のポイント等について、日ごろ対応している保育者から事前に丁寧に確認し、慣れない場所での反応や適応へのサポート、音楽活動における聴覚過敏や感覚特性への対応、制作活動の際のハサミなど道具の使用の可否、運動発達や言語・模倣の発達程度など、参加予定の子どもの現状を伺い、発達や特性に応じた対応を事前に共有し推測して準備することができた。

また、子どもの参加者数が限られることから、対応学生と子どもの人数バランスを考えながら、子どもへの刺激が過剰にならず、数少ない対面活動の機会を活かし多くの学生が体験できるように、活動に応じて中心的に子どもたちとかかわる学生と主に見守りを行う学生に役割分担するなど、事前の計画や準備を進めた。

●当日の活動の様子

実施時間前に施設の主任保育者が早めに来学され、参加する子どもたちの特徴や対応のポイントを改めてレクチャーしていただいた。Ｔｉｎｙスタッフや学生たちも、事前に子どもたちの様子や対応の仕方についてイメージを共有しながら望むことが可能となり、障がいのある子どもとの対面活動に初参加の学生が多い中でも、比較的落ち着いて対応することができた。

写真３．パネルシアターに見入る子どもたち

写真４．視覚活動で各自が反応示し始める様子

他の参加者は、開始時刻より前にゆとりを持ってバスで一緒に来学、ゆっくりと会場に慣れてもらった後、時間どおりに活動をスタート、それぞれの子どもたちのペースで楽しめた様子だった。最初は緊張や戸惑いの様子を示していた子どももいたが、職員の方と一緒に体を動かしたり、きれいな音色に反応したりしながら、徐々に自分らしく笑顔で活動に取り組む様子がみられた。また、すぐに慣れて笑顔で学生と嬉しそうにかかわる子どもの様子もみられ、楽しい遊びのワクワク感と共に普段とは異なる刺激を体験しながら、充実した時間を過ごしているようだった。写真３～５に活動中の様子を示す。

写真５．制作活動でそれぞれの紙皿花火づくり

制作活動では、各自が紙皿で自由に制作した花火が最後に夏の夜空に打ち上げられるという、ストーリ性のある共同制作を行った。まずは、それぞれの子どもたちが集中して自分の作品作りに取り組み、個性的な花火の数々が仕上がった。最後には学生の手を借りつつ、「おーっ」「ド

写真６．個性的なマイ花火が集まり美しい共同作品へ

ドーン」など子どもたちは思い思いの歓声を上げながらマイ花火の打ち上げ作業（模造紙への貼り付け）を興奮気味に見守り、花火の共同作品を完成させた。写真６は、子どもたち一人ひとりの作品から最終的に出来上がった共同作品である。

当日の活動の詳細については、表１にプロトコルの形で示す。

当日、第１回ふれあいＴｉｎｙ隊の活動後は、久々の対面活動だったこともあり、学生たちとじっくりと振り返りの時間をとった。振り返りタイムの前半は、Ａ施設の主任保育士の方が一緒に参加して感想や気づきを共有してくださり、学生の質問にも応じていただいた。後半の時間帯には、Ｔｉｎｙ教員とＴｉｎｙ隊の学生がそれぞれに感じたり気づいたりした内容や、今後に向けた意見等を出し合いながら、じっくりと振り返りを行い、対面活動の充実感を感じながらの実りの多い学びの一日となった。

表１．第１回ふれあいＴｉｎｙ隊の活動プロトコル

項目・目的	使用曲	使用楽器	活動内容
1．始まりの歌 ・活動、場面を切り替える ＊アセスメント	「手をつないでこんにちは」	パペット	歌いながら対象者一人一人の名前を呼びかけ、パペットを介した反応を促す。
2．視覚活動 ・注視 ・コミュニケーション	オリジナル 「もこもこ」	パネルシアター	オリジナルパネルシアターを用いて、参加者に問いかけながらパネルを動かす。
3．楽器活動 ・自己表現 ・遅速を感じる	「おもちゃのチャチャチャ」	水マラカス	音楽を聴いて自由に鳴らす
4．身体活動 ・聴覚と身体運動の即時反応 ・身体のコントロール ・遅速を感じる	即興	ピアノ	GO&STOP ピアノの音を聞いて、音が鳴っている間は走ったりして動き回り、音が止まったら止まる
5．制作活動 ・手の操作性 ・コミュニケーション	「花火」	紙皿・折り紙、のり等	紙皿の裏に折り紙を貼る。一人ひとり制作したものを台紙に貼り、花火に見立てる⇒最後に共同作品完成！
6．視覚活動 ・集合を促す・注視 ・コミュニケーション	「誰かが来たよ」	ペープサート	シルエットになっているペープサートを順番に出し、問いかける。裏返して正解を見せる。※夏の生き物
7．身体活動ダンス ・模倣 ・自己表現	「アンパンマン体操」	ＣＤ	音を聞き、学生の手本を見まねしながら、手足や体の部位などを曲に合わせて身体遊び
8．鑑賞 ・鎮静 ・集中	「となりのトトロ」	ピアノ連弾	演奏を聴く 各自のペースで、生演奏の楽器から直接届く刺激を全身で感じる
9．歌唱 ・共有感、一体感を味わう	「しあわせつくろう」	（ピアノ伴奏）	参加者全員で歌う、他者と共に楽しく声を出す
10．終わりの歌 ・鎮静 ・気持ちや状況の切替え	「さよなら」	エナジーチャイム	一人ひとり、エナジーチャイムの音を指先で押さえて消してもらう 自分のペースで活動を終える

（３）第２回ふれあいＴｉｎｙ隊の実践

第２回ふれあいＴｉｎｙ隊の活動は、第１回目を７月下旬に実施できたことの経験を活かし、様子をみつつ準備を進めることとした。地域では新型コロナのオミクロン変異株等による感染再拡大などの状況も生じていたことから、その他の活動と並行しつつ、次のふれあいＴｉｎｙ隊の活動実現に向けた検討を行った。実際には、事前の細かいやり取りや状況に応じ柔軟な対応が可能な市内のＢ施設（児童発達支援・放課後デイサービス）の利用者である子どもたちと職員を対

象に、年明けの２月に、第２回のふれあいＴｉｎｙ隊の活動を実現することができた。

●活動の概略

１．日　　時：2023年２月25日（土）13時30分～15時00分

２．場　　所：宇都宮共和大学５号館４階　保育実習室

３．内　　容：手あそび、パネルシアター、楽器活動、身体活動、音楽鑑賞等を通しての交流

４．対　　象：児童発達支援・放課後等デイサービスＢ施設の利用児童生徒５名（幼少期から学齢期）・きょうだい児１名
引率施設職員：４名、保護者２名

５．参加学生：子ども生活学部４年生１名、３年生５名、２年生３名、１年生４名
短大音楽科２年生１名、１年生１名

●実施までの準備

２回目の開催となり、ある程度見通しをもって、学生たちと共に準備を進めることができた。Ｔｉｎｙ隊のメンバーの中には当日参加できない学生もいたが、それらの学生も含め、実際の活動内容についての相談や事前準備にあたっては、学生が主体的積極的に準備に取り組んだ。

また、第１回活動と同様に、参加対象の発達支援Ｂ施設との事前打合せを丁寧に行うことで、子どもたち一人ひとりの発達特性や対応のポイント等について、日ごろ対応している保育者から事前に確認しつつ準備を進めた。対象児の中には、緊張の強い緘黙傾向の児童や行動障害のあるASD児も含まれているとの事前情報を共有していたため、新たな環境に対する抵抗や過剰な緊張が生じないような工夫をより一層心がけるなど、参加予定の子どもの発達特性に応じた対応を考え、事前に共有した情報を生かして準備を進めていった。

●当日の活動の様子

本番は午後からだったが、学生は午前中から集まって準備を整え、落ち着いて本番を迎えることができた。

実際の子どもたちとの活動場面では、各活動の主担当学生だけでなく、皆が協力し合い状況に応じた動きやサポート体制で活動を盛り上げていた。

写真７．パネルシアターを使ったコミュニケーション

参加した子どもたちも、最初は慣れない場所に緊張気味だったが、楽しい雰囲気や安心できる関わりの中で、緘黙の子どもが自分で名前を言えたり、強度行動障害の子が穏やかに自分のペースで楽しめたり、普段あまり動かないタイプの子が一緒に体操を楽しんだりと、それぞれのペースや取り組み方で充実した時間を過ごすことができていた。それら子どもたちの生き生きと楽しむ様子を示す姿に、日ごろから発達を援助に尽力している同伴職員が、喜びと感動で涙ぐまれるほどであった。

写真８．新聞紙を使って身体を動かす活動を楽しむ

また、一緒に参加された保護者やきょうだい児も共に活動を楽しまれ、とても満足したと嬉しそうに語っていた。

活動中の様子を写真７～９で示す。

参加した学生にとっても、実際の実践を通して多くの体験的学びを得られた様子だった。事前に情報共有した子どものイメージと実際に対応した自らの体験を結び合わせたり、新たな発見をしたりしながら、それぞれの子どもの運動発達や言語発達の程度など、子どもの特性や様子に応じた丁寧な対応につなげることができていた。更に、新たな場所や場面での反応や適応サポート、感覚の過敏さや特性への対応、制作活動の際の道具使用の工夫や援助など、子どもや支援者と直接関わりつつ自ら実践することで気づきを得て、一つ一つがより深い学びにつながったようであった。

写真９．各自の持ち味を生かしたモビール制作

写真10．子どもからＴｉｎｙ隊への贈り物と共に記念撮影

活動直後の振り返りの時間には、学生たちが子どもの反応と自身の対応についてじっくりと考察を深めたり、今後の活動に向けた気づきと提案を積極的に発言したりするなど、ふれあい活動を通して着実に成長しつつある様子がみられ、今後のＴｉｎｙ活動の更なる充実へとつながるものとなった。

当日の活動内容の詳細については、以下に、活動プロトコルを表２に示す。

表２．第２回ふれあいＴｉｎｙ隊の活動プロトコル

項目・目的	使用曲	使用楽器	活動内容
1．始まりの歌 ・活動、場面を切り替える ＊アセスメント	「手をつないでこんにちは」	タンブリン	歌いながら対象者一人一人の名前を呼びかけ、タンブリンを介した反応を促す。
2．視覚活動 ・注視 ・発語	「どんな色がすき」	パネルシアター（ピアノ伴奏）	①どんな色が好き？ 歌に合わせ人形画を動かし各自に好きな色を聞く ②やおやのおみせ（ピアノなし） 人形画を動かしながら全員で「ある」「ない」
3．手遊び ・模倣 ・ボディイメージ	「かみなりどんがやってきた」		歌に合わせて動作を行う。 最後の部分で身体部位を示し、模倣を促す。
4．身体活動ダンス ・発散 ・模倣	「パイナポー体操」	ＣＤ	最初に主要な動きを少し練習した後、CDに合わせて皆で踊る。
5．身体活動 ・自己表現 ・発散	新聞紙遊び	新聞	新聞を破く→丸める→投げる→拾う→大きなビニール袋に入れて雪だるまを作る。
6．制作活動 ・手の操作性 ・創造力	モビール	画用紙、タコ糸、など	桜の花びらや、葉っぱ形の紙を用意し、動きを楽しみつつ渦巻状の台紙に自由に貼ってもらう。 用意するもの：白画用紙、桜の花びらや葉っぱの画用紙、タコ糸、ハサミ
7．視覚活動 ・注視	「誰かが来たよ」	ペープサート	シルエットになっているペープサートを順番に出し、問いかける。裏返して正解を見せる。→ディズニー
8．鑑賞 ・集中 ・共感	「夢をかなえてドラえもん」	ピアノ連弾	演奏を聴く

9．歌唱 ・共感 ・手の操作性	「にじ」		手話をしながら歌う
10．終わりの歌 ・鎮静 ・気持ちや状況の切り替え	「さよならの歌」	エナジーチャイム	一人ひとり、エナジーチャイムの音を指先で押さえて消してもらう

３．Ｔｉｎｙファミリーコンサート～障がいがあってもなくても子どもからおとなまでみんなが楽しい音楽のつどい～

本年度にＴｉｎｙファミリーコンサートは記念すべき第10回を迎えた。一昨年、昨年と２年連続でオンライン配信による実施となっていたが、今回は３年振りに集合参加型の対面実施のスタイルで開催することができた。

（１）開催までの道のり

第10回コンサートは何とか対面実施を、と考え準備を進めていたが、感染症拡大状況により、県から８月初旬「BA.5対策強化宣言」の発出、その後の宣言延長がなされるなど、無事開催できるかどうか気がかりな状況が続いていた。

重度障がいのある方も含め乳児から高齢者までが安心して参加できるような、会場集合型のコンサートの実現が可能かどうか、会場の選択から開催方法の工夫や配慮等の検討を重ねた。

コンサート出演者の選定にあたっては、音楽性の高さや演奏の素晴らしさに加えて、Ｔｉｎｙコンサートの趣旨をご理解くださり、コロナ禍での実施にあたって事前の詳細な打ち合わせや当方からの要望をある程度受け入れていただけること、急な変更等にもご対応いただける方であることが求められた。そこから、数年前の偶然の出会いを頼りに、本学とも縁の深いエレクトーン奏者である石下有美氏という素晴らしい出演者が決まり、実施に向けて本格的に動き出すことができた。

図２．第10回Ｔｉｎｙファミリーコンサートのポスター

会場選定にあたっては、換気問題や空間の広さ、車いすやバギーでの参加ができるバリアフリー環境、感覚過敏等に対応する控室や乳幼児への対応、近くまで安全に乗り入れできる駐車場、大学からの各種の荷物や機材の運び入れが可能であること、早期予約可能であること、利用料が高額でないこと等々、必要な要件を一定水準で満たすような会場を探した。その結果、宇都宮市サンアビリティーズ体育室を会場に設定し、会場予約においては、障害者団体として早期予約が可能な日本ダウン症協会栃木支部の方々にご協力いただいた。日本ダウン症協会栃木支部の皆さんには、その予約作業のやり取りから始まり、今回のファミリーコンサートの共催者としてコンサートの周知や運営に多くのご協力いただいた。

（2）コンサート当日の様子

●催しの概略

1．日　時：2022年10月９日（日）14時00分～15時30分

2．場　所：宇都宮市サンアビリティーズ　体育室

3．内　容：音楽鑑賞や音楽体験活動等を通しての交流（二部制）

第１部　プロによるエレクトーン演奏会

出演：石下　有美　～誰もが知っている名曲の数々を壮大なスケールで♪

※一緒に音楽遊びをするコーナーもあり

第２部　手作り太鼓をみんなで演奏！

※Ｔｉｎｙ隊のメンバーと一緒にみんなで盛り上がろう♪♪

4．参加者：障がいの有無にかかわらず乳児から高齢者までどなたでも（当日参加者は168名（うち小学生以下36名だった））

5．ボランティアスタッフ（Ｔｉｎｙ隊および卒業生）：

子ども生活学部４年生２名、３年生２名、１年生３名、卒業生６期生／８期生各１名

短大音楽科　　２年生１名、１年生１名

6．共　催：日本ダウン症協会栃木支部

●当日の活動の様子

当日は、天気予報では若干の小雨が懸念されたが、実際はコンサートおよび前後の時間帯は降雨もなく、乳児から高齢者まで幅広い年齢層の、自力で動くことが難しい方、自閉症やダウン症の方なども含め多様な参加者が、ご家族やご友人と共に参加された。様々な事前の配慮や、当日もスタッフが状況に応じて臨機応変に対応できる体制で臨むことにより、特にトラブルもなく、丁寧な対応と配慮で安心して楽しんでいただくことができた。

写真11．第10回Ｔｉｎｙファミリーコンサートの会場の様子

二部制に分けての実施だったが、第一部のメインは、地域で活躍するプロ奏者である石下有美氏の豪快かつバラエティに富んだエレクトーン演奏で、思い思いのスタイルで味わった。小さな子どもの中には全身を揺らしたり踊ったりしながら聴いていたり、障がいのある方も家族と共にゆったりと演奏を楽しむことができたりしているよ

写真12．プロの生演奏を間近で楽しむ子どもたちと家族

うだった。演奏は、アニメソングや往年のヒットソング、ポピュラー音楽まで、誰もが一度は耳にしたことがある名曲の数々が情感豊かに壮大に演奏され、合間の語りでは奏者ご自身の体験が曲と合わせて披露され、会場が温かな空気に包まれた。

第一部の最後は、学生スタッフが主導しての手あそび歌を、プロの即応的なエレクトーン伴奏に乗せて参加者と一緒に楽しみ、会場が明るい笑顔に包まれた。以前からＴｉｎｙファミリーコンサートでは、プロ演奏と共に皆で合唱や合奏をする機会を設けていたが、今回は感染予防を考慮し、声を出さずに楽しく実施できる手あそびでの参加でスタイルを取り入れた。結果として、元気な子どもたちの盛り上がる雰囲気と、普段は手あそびをしないであろう大人や年配者も含めて、素敵な演奏に乗って抵抗なく自然に身体が動く様子がみられ、会場が楽しい雰囲気で盛り上がった。

第二部の手作り太鼓演奏は、導入として、Ｔｉｎｙ隊学生の太鼓メンバーによる太鼓演奏からスタートした。カホーンやジャンベ・コンガなどのアフリカンドラムや手作り太鼓で、石下氏のエレクトーン演奏による「フレンド・ライク・ミー」の曲に合わせて、学生たちが乗りよく太鼓演奏を披露した。

写真13. 手作り太鼓をみんなに配って、ドラムサークルの楽しい演奏体験へと導入

その後、いよいよ会場の参加者全員に手作り太鼓を配り、ファシリテーターの合図や曲に合わせて、ドラムサークル形式で皆が太鼓演奏を楽しんだ。

手作り太鼓を自由にたたくところからスタートし、各自が曲のリズムに乗って自由に太鼓たたきを楽しんだ後、他の楽器（マラカスや鈴、タンブリンなど）も配って自由に演奏、各自のペースや演奏法で楽器に親しんだ。その後、エレクトーンの「アンダー・ザ・シー」の演奏に合わせて自由にたたきつつ皆で大合奏。最後には、太鼓だけを使い、ファシリテーターの合図に合わせて太鼓をたたき、最終的に皆の音がそろって響き合い、心地よい一体感が生まれた。ラストは、全員が息の合った一体感ある太鼓の一叩きで「ドン！」とフィニッシュしたとき、会場全体でワーッと興奮気味に歓声が沸き起こるほどに共同体験の爽快感を皆で味わい、素晴らしい盛り上がりとなった。

写真14. 参加者がそれぞれに楽器演奏を楽しむ様子

なお、手作り太鼓の作成など前日までの準備にはＴｉｎｙ隊の学生たちが活躍し、当日は卒業生も応援に駆けて裏方として大活躍、ダウン症協会のスタッフも会場整理や参加者対応にご尽力くださるなど、多くのスタッフが力を合わせて陰でコンサートを支えてくれていた。途中、マイクトラブルなど若干のアクシデントも生じたが、それを払拭するほどの会場に広がる温かな雰囲

気と状況に応じた臨機応変な対応があり、安心して思いきり楽しみ、心地よく盛り上がるコンサートとなった。

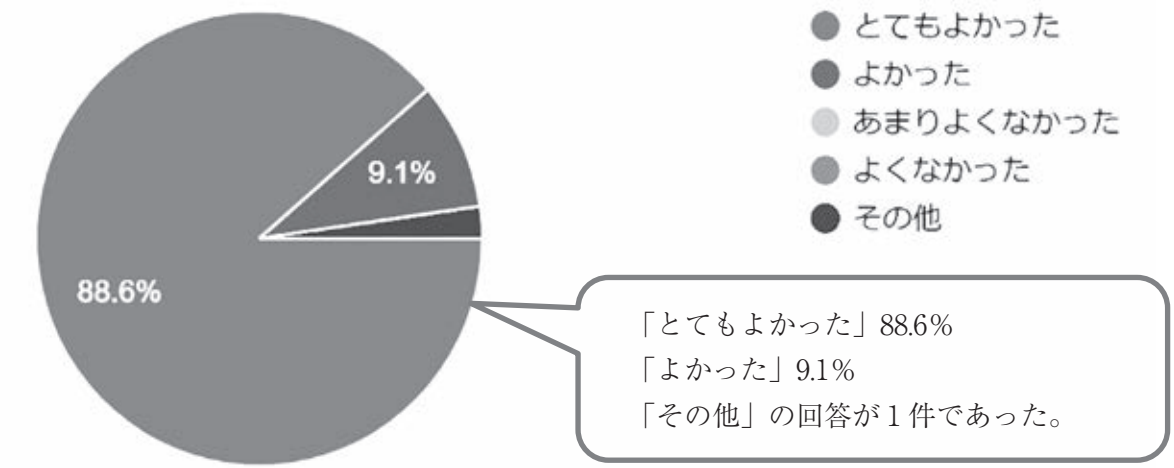
帰りがけには多くの参加者から、「楽しかった」「また参加したい」等々との声が聞かれ、記念すべき第10回のＴｉｎｙファミリーコンサートは盛況を得て無事終えることができた。

写真15. 出演者の石下有美氏を囲んで、Ｔｉｎｙスタッフ＆Ｔｉｎｙ隊メンバー、ダウン症協会スタッフらと共に

（３）参加者対象の事後アンケート結果

コンサート終了後に参加者アンケートを実施したところ、自由記述も含めて多くの方が回答くださった。以下にその内容を示す。

１）第10回『Ｔｉｎｙファミリーコンサート～障がいがあってもなくても子どももおとなもみんなが楽しい音楽のつどい～』に参加した感想をお聞かせください。（44件の回答）

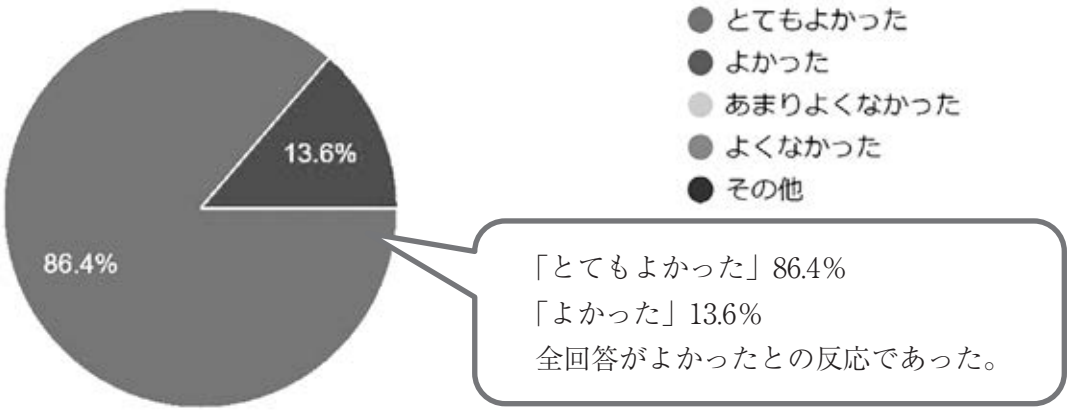


理由・感想など（自由記述）35件の回答

・みんなで楽しめるあたたかい形のコンサートだったから
・一番後ろの席から見ていたのですが、子どもから大人まで全員が体を揺らしたり各々が楽しんでいる姿を見られてとても良い時間でした。
・エレクトーンの演奏や子供と一緒に太鼓を叩いて、周りの人と一体感を楽しめた
・たのしかった
・Ｔｉｎｙ大好き♡、よかった！
・エレクトーン演奏が素晴らしかった。選曲も子供が好きなものばかりでした。糸は感動的で、子どもも感動したのか目が赤くなっていました。参加型の太鼓演奏も楽しそうでした

・楽しくて、ウキウキしました。コンサートも、太鼓も、最高でした元気を頂きました
・石下さんのエレクトーンがとっても上手で、それにノリノリで踊っている子供たちもいて、なんか、涙が出てきてしまいました。感激です
・音響の良いホールでの演奏会もいいですが、子どもたちが自由に動ける会場でのコンサートもとても良かったです。エレクトーン演奏も会場にマッチして素晴らしく選曲も良かったです。「糸」は保護者の方や年齢の高い障がい者の方も目を潤ませていました。Ｔｉｎｙの学生さんたちは一生懸命で、MCもとても上手でした
・子どもの知っている曲が多かった。手遊びや太鼓など少し体を動かすことができて良かった
・みんながそれぞれに音楽の感じ方が違い、それぞれが楽しめる会になっていたと思えたから
・有美先生の素敵な演奏、学生の皆さんと参加した皆が一体となった太鼓や楽器演奏楽、本当に楽しかった
・アンダーザシーの曲は、よく聞いている曲なので、とてももりあがりました
・久々の対面で、リスクある方のためにも会場選びなど工夫されていた
・ノリノリの楽しいコンサートでした。楽しかったです
・大学のホールでなかったので、その時の音響に比べて、マイクなど聞き取れないことがあった
・ありがとうございました。主人も息子も大変楽しめたようです。エレクトーン一台なのに、まるでオーケストラの演奏のようでした
・音楽に、動き、選曲、全員参加の機会があったことなど、色々楽しめました
・石下さんの演奏とても素晴らしく、心動かされました。また次回も参加したいです
・久しぶりに生の音楽を聴けて、うれしかったです
・曲選びも楽しく盛り上がるものばかりで良かったです
・みんなで参加できることがとてもよかったです。エレクトーンの演奏、すばらしかったです
・演奏がすばらしかったのはもちろんですが、一体感があった
・たいこが楽しかった
・第２部で大人と子どもみんなで演奏でき、とても楽しかった、手作りの楽器あたたかみを感じました
・子どもがとても楽しそうだった
・エレクトーンの演奏がとてもよかった。思いがこもっていて心にしみました
・選曲もよく、時間があっという間でした
・エレクトーンのきれいな音色、楽しいリズム、トークも心に響きとてもよかったです。子どももニコニコでした♪
・エレクトーンのコンサートは初めてでした。オーケストラのようで感動しました！これから石下さんお応援させていただきたいと思いました。素敵な演奏ありがとうございました
・ノリノリだったからです
・石下先生のしゃべっている言葉が曲名等、聞き取りにくいことがあった
・自由に音楽を楽しめるのがよかったです

２）本日のスタッフやボランティア等の対応はいかがでしたか（44件の回答）



理由・気づいた点などあれば教えてください（自由記述）25件の回答

・応援しています
・学生さんが一生懸命頑張っていた
・一緒に盛り上げていて良かったです
・笑顔で明るく感じが良かった
・ダウン症児とその妹、２人を連れて参加しました。妹がトイレに行きたいのに、兄は行きたくないの一点張り。大人１人で子供２人の別行動は難しい所、困ってしまいました。そんな時、優しい学生さんが、ささっと、妹をトイレに連れて行って下さり、とても助かりました
・明るく元気に説明をしてくれました
・エレクトーン演奏もとってもよかったし、学生さん主導の体験型音楽も楽しかったです。みんなが、一つになったような、素敵な時間を過ごすことが出来ました。ありがとうございました
・駐車場の案内から入場まで親切に対応してくれました
・受付など少し困っていたら、直ぐにスタッフ・ボランティアの方が声をかけてくれた
・皆さん優しく丁寧に接してくださいました
・みなさんとてもやさしくしてくれました
・中にはおとなしい方もいたので、ハキハキ明るいともっといいなと思う
・みんな明るくて親切でした
・きびきびと動いてくださり、助かりました
・挨拶、声掛け、元気よく、よかったです
・学生さんたちも盛り上げてくれて感謝です
・皆さまとても親切で楽しかったです
・気配りがすばらしく楽しかったです
・丁寧な対応と笑顔、ありがとうございました
・段ボールやバケツがとても良い楽器となって、一体感があって楽しかったです、また行ってください♡
・楽しい時間をありがとうございました
・子どもに優しく接してくれた
・きちんとされて礼儀正しく、ありがとうございました
・やさしいから

・楽しんでされているところがよかったです

3）その他、ご意見・ご感想などを、自由にお書きください（自由記述）31件の回答

・これからもずっと継続してほしいです
・引き続きがんばれ
・このような機会があるととても嬉しいです。ぜひ今後も開催していただきたいです
・是非また開催してください！
・来て良かったなと思いました。開催して下さり有難うございました
・障がい児と出掛けるのは、大変で、億劫になりがちです。気を遣わなくても良い場所を提供して下さり、ありがとうございました。コロナ禍で、この様な機会が減っていたので、久々に楽しかったです
・久しぶりの音楽会で嬉しかったです。またよろしくお願いします
・また、このようなイベントがあったら、参加したいです。今、療育施設で働いているので、参考になりました。ありがとうございます
・学生さんたち三連休の中日なのに、一生懸命動いている姿、とっても素敵でした
・うちの子供は、あまり大きい音だと怖がってしまいます。ああいう場所は苦手ですが、本人が「行く」と言ったので、どうかなと思いながら足を運びました。うちのように音に敏感な場合、パンフレット等に音が大きく聞こえるのはここらへんなど最初に図などで示しておいていただけるとありがたいなと思いました
・楽しくひとときを過ごせました。このようなイベントが永く続いていくことを願っております
・子どもから大人まで楽しめました。また、この様な機会をつくって頂きたいです。ありがとうございました
・これからも同様の会が開催されたら、参加したいと思います。ｔｉｎｙの学生の皆さんが希望する職業に就き、ご活躍されますように
・先生方、学生の皆さん先日は、お世話になりました。はじめは音を怖がっていた娘ですが気がついたらノリノリで楽しんでいました。また、機会がありましたら参加したいです。ありがとうございました
・今回初めて参加させてもらいました。前半から、知っている曲が多かったこともあり、広々とした体育館、見慣れた場所、知っている人が多かったこともあり、緊張しやすい息子なのですがとてもリラックスしてコンサートを聞くことが出来ました。エビカニビクスの時は、飛び上がって喜んで参加していたので、親の方が驚きました。第二部の太鼓もとても楽しかったそうです。参加ができるコンサートは、とても盛り上がりますね。またぜひ参加したいと息子も言っていました。今度は、パプリカとSDGsソングのツバメをリクエストしたいそうです。楽しい音楽会をありがとうございました！（´▽｀）
・厳しい条件の中での工夫が感じられました。トイレが少なく、休憩時間に混雑していました。もう一声なにか対策があると、トイレ対応に時間が必要な方でも焦らずに済むかなと思いました
・また、次回楽しみにしています
・これからも毎年楽しみにしています
・マイクの調子が悪く聞きづらかったのが残念でした

・これからも継続していってください
・ありがとうございました
・みんなでリズムが揃ったときは、とても感動しました
・またぜひ参加したいです
・とても楽しい時間をいただけ、本当にありがとうございました
・とても楽しい時間がすごせてよかったです。スタッフの皆様ありがとうございました
・参加型だったので、子どもが飽きずに楽しめました、ありがとうございました
・初めての参加でしたが、とても楽しかった
・今後の活動も楽しみにしています
・お子さんが皆さん集中して聞いていて、音楽と演出はすごいなと思いました。石下さんのご主人様が難病と伺い、胸がいっぱいになりました。病に負けないで「日々当たり前のことに感謝しています」との明るいお人柄が演奏にあらわれ、私たちに元気をくださっているんだなと思いました。毎年（今回は３年ぶりですね）いつもステキなコンサートをありがとうございます
・たのしかった、きぶんてんかんになった、ありがとうございます
・皆が参加できてよかった、エビカニ体操おもしろかった、気軽に楽しめ、コンサート会場に階段がないのもよいですね！

（４）第10回Ｔｉｎｙファミリーコンサート開催までの歴史と軌跡

10回目の節目を迎えたＴｉｎｙファミリーコンサートは、2022年10月に無事終了した。この機会に改めて、これまでファミリーコンサートやゴールデンウイーク・スペシャルイベントとして、障がいがあってもなくても皆で楽しむ多数の催しを地域で開催してきた歴史を一覧表にまとめ、以下の表３に示す。

表３．ＴｉｎｙファミリーコンサートおよびGWスペシャルイベント実施状況

回	開催日	内　容	出演者
1	2013年９月22日（日）	第１回Ｔｉｎｙコンサート （スペシャルジャズコンサート）	豊田チカ（ボーカル）、田中裕士（ピアノ）、小山太郎（ドラム）、生沼邦夫（ベース）
2	2014年５月４日（日）	第１回ＧＷスペシャルイベント （みんなで踊ろう！アフリカンダンス）	西アフリカの太鼓演奏とダンス「パランパラン」の皆さん
3	2014年９月15日（月祝）	第２回Ｔｉｎｙファミリーコンサート （声楽、フラメンコ、朗読など）	吉武まつ子（メゾソプラノ）、吉武大地（バリトン）、吉武萌（ソプラノ、フラメンコ）
4	2015年５月３日（日）	第２回ＧＷスペシャルイベント （マジックと音楽と絵本パフォーマンス）	大友剛（マジック・ピアノ・鍵盤ハーモニカ・絵本朗読）
5	2015年９月20日（日）	第３回Ｔｉｎｙファミリーコンサート （オカリナとギターのアンサンブル）	ねんど:小山京子（フルート・オカリナ）、吉塚光男（オカリナ）、斎藤浩（ギター）
6	2016年５月７日（土）	第３回ＧＷスペシャルイベント （西アフリカの音楽とダンスと屋外交流）	西アフリカの音楽演奏楽団「コナンカマ」の皆さん
7	2016年９月22日（木祝）	第４回Ｔｉｎｙファミリーコンサート （歌とピアノとお話、スティールパン演奏）	木村真紀（シンガーソングライター）、オカピ（スティールパン）
8	2017年５月７日（日）	第４回ＧＷスペシャルイベント （スティールパンのバンド演奏と屋外交流）	スティールパン・バンド「ＴＲＩＮＩＳＴＡ」の皆さん
9	2017年９月16日（土）	第５回Ｔｉｎｙファミリーコンサート （パフォーマンス・ミュージック・ユニット）	Ｃｉｅｌ：浅沼杏花（バイオリン）、石川陽介（ピアノ・ボディーパーカッション）
10	2018年10月20日（土）	第６回Ｔｉｎｙファミリーコンサート （打楽器の愉快な演奏とドラム＆サックス）	ふーちん（ドラム・打楽器・鍵盤ハーモニカ）、とんちゃん（サックス）

11	2019年９月16日（月祝）	第７回Ｔｉｎｙファミリーコンサート （ピアノ、歌、パーカッション、マリンバ）	木村真紀(歌･ピアノ)、牧野香苗(パーカッション・マリンバ)、べんちゃん（歌と絵）
12	2020年９月下旬～	第８回Ｔｉｎｙファミリーコンサート オンライン配信～第１部～	人形パフォーマンス、ユーフォニュームアンサンブル、音楽物語「食いしん坊のピーと動物たち」 出演：Ｔｉｎｙ隊、音楽科学生
13	2020年10月上旬～	第８回Ｔｉｎｙファミリーコンサート オンライン配信～第２部～	カップダンス、ピアノ＆打楽器＆管楽器アンサンブル、段ボールパフォーマンス「スリー・ウンチーズの歌」 出演：Ｔｉｎｙ隊
14	2020年10月下旬～	第８回Ｔｉｎｙファミリーコンサート オンライン配信～第３部～	鍵盤ハーモニカアンサンブル、ミュージックベル合奏、みんなと歌おう大合唱 出演：Ｔｉｎｙ隊
15	2021年12月中旬～	第９回Ｔｉｎｙファミリーコンサート オンライン配信	タンブリンダンス、パネルシアター、トーンチャイム演奏、和楽器アンサンブル、大合唱 出演：Ｔｉｎｙ隊＆Tinyちゃん
16	2022年10月９日（日）	第10回Ｔｉｎｙファミリーコンサート	第１部：石下有美(エレクトーン演奏) 第２部：手作り太鼓でドラムサークル

４．その他のＴｉｎｙとしての活動

（１）長坂キャンパスの大学祭（彩音祭）でのワークショップと展示活動

11月12日（土）～13日（日）にかけて実施された大学祭では、ワークショップとＴｉｎｙの活動展示や手作り楽器などに親しんでいただいた。

例年行ってきた音楽ワークショップは、対面で実施できた。感染症対策を行いながら、Ｔｉｎｙの活動に興味をもって参加されるお子さんとご家族を中心に、大学祭を見学しながらたまたま来場くださった大人の方々にも楽しんでもらえる活動となった。

写真16．彩音祭での音楽ワークショップの一場面

これまでの活動についてまとめた展示コーナーや手作り楽器を楽しむ展示などにも、絶え間なく来場者が訪れ､熱心に見学されていた。Ｔｉｎｙ隊の学生メンバーが交代で解説や見学のサポートを行った。

Ｔｉｎｙがこれまで積み重ねてきた活動の記録をじっくりと見学される保護者の方々も多く、遊びコーナーや手作り楽器コーナーは小さなお子さんを連れたご家族に大好評だった。

糸をウエットティッシュで湿らせ、紙コップを持ちながら勢いをつけて糸をこすると、カエルの鳴き声のような音が聞こえてきます♪
大きさの違いやこする強さの違いで、音色も様々！

写真17及び18．人気の手作り楽器展示（鳴き声コップ）とTiny活動展示

（２）ＨＰを利用した情報発信

Ｔｉｎｙでは、以前から少しずつ行っていたＨＰ上での情報発信を継続し、ブログで活動の様子などを公開してきた。　⇒https://www.tinytiny.info/

内容はＴｉｎｙ隊の練習や活動の様子、大学からの季節の便りなど、気軽に親しみを感じられるものにして、オンラインコンサートやFacebookやTwitterとも連動しつつ情報発信を行っている。

（３）SNS（フェイスブック、ツイッター、インスタグラム）での学生主体の情報発信

Ｔｉｎｙの活動の様子や、障害のある子どもでも楽しめるような短い遊び動画など、その時々の情報を発信している。特に、Twitterでは子どもたちが簡単にできるおうち遊びのミニ動画を月１回程度定期配信しており、手軽で可愛い内容が好評である。

５．共生社会とちぎづくり表彰（障害者差別解消部門）における表彰

2022年12月には、これまでの長期にわたる障害者差別解消につながるＴｉｎｙの地道な活動が認められ、栃木県から「共生社会とちぎづくり表彰（障害者差別解消部門）」という知事表彰を受賞した。

共生社会とちぎづくり表彰は、障がいの有無に関わらず、誰もが共に支え合う社会の実現のため、県民の模範となる取り組みを行ったと認められる事業者を表彰するもので、「障害者差別解消部門」「障害者の工賃向上部門」「ナイスハート部門」の３部門からなり、今回Ｔｉｎｙでは、「障害及び障害者に関する理解促進や合理的配慮の浸透・定着等に取り組み、障害者差別の解消の推進について特に顕著な功績があると認められる県民、事業者及び団体」として「障害者差別解消部門」を受賞するに至った。以下に受賞者一覧を示す。

令和4(2022)年度 共生社会とちぎづくり表彰 受賞者一覧

※50音順

(1)障害者差別解消部門

障害及び障害者に関する理解促進や合理的配慮の浸透・定着等に取り組み、障害者差別の解消の推進について特に顕著な功績があると認められる県民、事業者及び団体

	受賞者名	所在地	受賞理由
1	宇都宮共和大学子育て支援研究センターTiny	宇都宮市	障害の有無に関わらず、赤ちゃんから大人まで誰もが共に楽しめる音楽コンサートや「あそびの集い」を継続して開催するなど、障害者の理解促進や交流促進に貢献

(2)障害者の工賃向上部門

障害者が地域において自立した生活を実現できるよう、障害者の工賃向上を推進するため、障害者就労支援事業所からの物品の調達等に積極的に取り組む事業者

	受賞者名	所在地	受賞理由
1	社会福祉法人厚生会 特別養護老人ホーム鶴の香荘ほのかさろん	小山市	平成30年から月に2回程度施設内ロビーにおいて、事業所で作られた製品(パン、クッキー、パウンドケーキ等)の販売スペースの提供をしており、高齢者等と交流しながら販売機会の確保や工賃向上に貢献
2	株式会社さがみや	日光市	平成18年から定期的にスーパーに陳列する野菜の袋詰めを発注しており、受注機会の確保や工賃向上に貢献
3	株式会社秀和　佐野工場	佐野市	平成30年から週5日程度、病院や施設等で使用されたリネン類やおしぼりを洗浄後、折りたたみ・結束・袋詰作業等を発注しており、受注機会の確保や工賃向上に貢献
4	株式会社三ッ山羊羹本舗	日光市	平成17年から、定期的に店舗で販売する商品の商品用箱の組立を発注しており、受注機会の確保や工賃向上に貢献

(3)ナイスハート部門

障害者就労支援事業所で作られた商品の販売促進を図るナイスハートバザールの開催に積極的に取り組む事業者

	受賞者名	所在地	受賞理由
1	有限会社マザー・コーポレーション	宇都宮市	病院等で清掃作業を行う際に、事業所で作られた商品(クッキー、パウンドケーキ等)を、障害者の描いた絵や手紙を同封して進物として利用しており、障害者就労支援施設の取組及びその商品等の普及啓発に貢献

Ｔｉｎｙの受賞に関しての記載部分

※栃木県HPより転載
https://www.pref.tochigi.lg.jp/e05/welfare/shougaisha/documents/20221214kyouseisyakaihyousyou.pdf

思い返してみれば、受賞の知らせが届く２か月近く前の10月開催した第10回Ｔｉｎｙファミリーコンサート会場に、突然知事からの祝電が届いたことがあり、そのときは初めての出来事に驚いただけだったが、その時点で、既にＴｉｎｙの日ごろの活動が注目されつつあったのかもしれない。

写真19. 表彰状を手にするＴｉｎｙ隊メンバーたち

普段から特にアピールや広報活動をしているわけではないＴｉｎｙの地道な活動の積み重ねが、このように注目され、公に認めていただけることは、これまでＴｉｎｙが活動を通して大切にしてきた、障がいの有無にかかわらず自分らしく楽しく幸せに地域で共に支え合いながら生きていくことの意識が、社会全体で尊重されつつあるとも考えられ、うれしいことである。

十年以上前に活動を始めた頃、まだ障がいのある子どもやそのご家族が差別や偏見の目で見られることが珍しくなく、その辛さを涙ながらに語られる保護者の姿が思い起こされる。その後、障害者差別解消法の制定や啓発活動の推進なども重ねられ、社会の意識は変わりつつある。しかし、同時に、根強い偏見や、する側が気づかないで行ってしまう差別も含め、未だに差別や排除は生じていることも見聞きする。今回たまたま県から表彰をいただく栄誉を得たが、これからも変わらずに、地道であっても着実に、子どもや家族や地域に貢献できる活動を継続していきたい。

６．まとめに変えて

今年もまた、桜の便りと共に１年間の活動を振り返る時期がやってきた。2022年度を振り返って、見通しの持ちにくい状況が更に続く中、Ｔｉｎｙとして「今」だからこそできる、したい、しなければならないことを真剣に模索しながら活動したことは、新たな学びや発見があり、今後の活動へのヒントにもつながった。

全国的に３年以上続いた新型コロナウイルスへの危機対応が転換点を迎えつつある今、各人の認識に任せた対処の流れが進むことは、制限からの解放も感じられる反面、障がいのある方や家族にとって安心につながることばかりではない。柔軟な発想と豊かな工夫で時代に即した新しい援助や育ち合いの実践を継続する必要性と、その場しのぎでなく、人間社会の枠組みが変化しても変わらぬ人の育ちの本質を大切にし続ける重要性が高まっていることを改めて強く感じる。

2022年度のＴｉｎｙの活動に限って考えても、新たな活動形態として始めた「ふれあいＴｉｎｙ隊」の実践で、やむなく対象者を限定するスタイルにしたことが、結果として、対象者に合わせた十分な準備やある程度予測をしながら学生が落ち着いて関わることができること、実践後の学びを深めやすくなったことなどの大きな利点も生じさせた。反面、「ふれあいＴｉｎｙ隊」のスタイルでは対象者が小さく限定されてしまい、地域で子育てする参加希望ご家族の受け入れができないという見過ごせないデメリットも生じる。従来からの地域家族を対象とした「遊びの集い」と新たな「ふれあいＴｉｎｙ隊」のメリット・デメリットを踏まえ、バランスよく組み合わせたり進化させたりしながら、より地域や子育て家族、学生の育ち合いのニーズに合う活動を続けていくことが今後の課題である。

第10回ファミリーコンサートでは、会場や内容について、演奏を楽しむコンサートとしての音

響設備や音楽環境の点では、これまでの音楽ホールでの実施には及ばないものの、全員参加やみんなで心置きなく安心して楽しむという点では、これまでにないほどの成果があった。現在のＴｉｎｙの活動で、高度な音楽環境と楽しい参加型イベントの両立は難しく、中途半端に二兎を追う者にならないよう気を付けなければならない。状況や社会の変化に伴い今後のＴｉｎｙファミリーコンサートで何を大切に考えどんな実現を目指そうとするのかを見失わず、これからも皆で力を合わせ楽しい実践を重ねていけることを願っている。

学生たちにとっても、手探りで継続し工夫を重ねるＴｉｎｙの活動経験は、共に成長し合う学びの場、育ち合いの場となると共に、これからの不確実な時代に活躍する保育者や音楽療法士としての成長を促す貴重な経験となっていると確信する。これからの保育者・教育者・援助者養成教育では、環境の変化、時代の要請に応じて、自ら柔軟に変えていける能力の育成も重要である。更に、社会の変化に伴い、環境や形が変わるだけでなく、私たち自身の価値観や考え方も変化する。時代の大きなパラダイムシフトに伴う変化の表裏や功罪を注意深く見極めつつ、慎重かつ臆することなく今後の活動を展開しなければならない。

最後に私事ではあるが、この３月一杯で子ども生活学部を早期退職し、Ｔｉｎｙの責任者も次のメンバーにつないでいくことになった。今後は、客員研究員として引き続きＴｉｎｙの活動を見守り応援し続けることを記しておきたい。

紙面を借り、これまで共にＴｉｎｙの活動を真剣に支え育ててくださった二人の仲間である大島講師、星准教授に心から感謝を伝えたい。大島先生は、音楽療法の専門性を活かしＴｉｎｙの活動内容や学生指導に全力で取り組んでくださった。星先生は、保育者としての経験と知恵を生かした学生指導と得意な動画編集等で前向きに楽しみながら取り組みを支えてくださった。メンバー三人それぞれの持ち味を活かし活き活きと前進できたからこそ、Ｔｉｎｙ活動とＴｉｎｙ隊学生たちの成長が充実したものになったと確信する。本当にありがとうございました。

そして、Ｔｉｎｙ立ち上げ時に共に活動し大変お世話になった中畝先生、山本先生にも改めて感謝と尊敬をささげたい。お二方とも、現在もそれぞれの地でお力を発揮し大活躍なさっている。今後の自分自身も見習っていきたい。

これまで活動に参加してくださった方々を含め、日頃からＴｉｎｙ活動を理解し支えてくださるすべての方々に感謝を伝え、地域の現状やニーズに開かれた「最適な」「心地よい」場や援助を追求し、今後の活動の発展し創造し続けるＴｉｎｙの活動を、立場は変わっても、これからも応援し続けたい。

常に信頼し、共に成長し合えるＴｉｎｙメンバーへの最大の敬意と感謝を込めて、以下に改めて記し、本稿の結びとする。

☆Ｔｉｎｙの活動メンバー

宇都宮共和大学子ども生活学部

教　授　　土沢　　薫

准教授　　星　　順子

講　師　　大島美知恵

サークルＴｉｎｙ隊の学生たち

Ⅳ．「親子遊びの会」
－子育てネットワークづくりプロジェクト－　実践報告

子ども生活学部　准教授　今　村　麻　子

１．はじめに

「親子遊びの会」は、これまで地域の子育て支援を学生ボランティアを中心に様々な行事を主催してきた。2020年からの３年間は、地域の親子も学生の大学生活もコロナ感染症流行の影響を受けたが、感染症予防をしながら子どもたちが楽しく参加できる遊びや子育て支援イベントの形を検討しながら活動してきた。アンケートの保護者の声からも、幼い子を育てている家庭にとって閉塞状況にこそ、このような親子を支える会の意義があることが確認されてきた。2022年は７月に栃木県大学地域連携支援事業に採択され、これまでのイベントを単発で実施する形から一歩発展させた親子支援の形を模索し、地域の「親子サークル」「子育てサークル」との連携を試みることとなった。

２．プロジェクトの目的

地域に暮らす未就学児をもつ家庭を対象として、父親を含めた親子同士、家族同士、異世代間の交流を目的とし、学生・教員ともに地域における役割について検討する。

活動に際しては、対象者が主体的に参加できることを目指し、親子で遊び、円滑な親子関係、親子同士の繋がりを促せるような援助のあり方について学生と教員ともに学ぶ。

３．親子遊びの会2022年度の活動の計画

（１）参加対象者

地域に在住の未就学児をもつ家庭

（２）スタッフ

教員と学生が活動内容について企画、準備を行い、当日の運営、援助等にあたる。

（３）実施期間・場所

本学施設

ミナテラスとちぎ

（４）コロナ感染症対策

本学のコロナ感染症対策を基本として対策を行った。

４．実施した活動の概要

教員と学生有志ボランティアが検討した計画に沿って、各回のイベントの内容を決定し、当日までの準備を学内で行った。主には昼休みや放課後の時間を利用して、製作物の製作、司会、絵本の読み聞かせの練習を行った。当日は、親子が楽しんで安全に参加できるようにサポート役を

務めた。11月26日実施の親子リトミックの会は子育てサークルの代表も中心的役割を担われた。（子育てサークルとの連携内容については別頁「大学地域連携活動支援事業報告」に記述する。）

2022年度開催一覧

回（通算）	開催日	活動内容	参加者 子ども	参加者 保護者	学　生	教　員	場　　所
１回（46回）	2022年５月７日	子ども忍者に変身	９人	８人	11人	３人	本学グラウンド
２回（47回）	2022年11月26日	親子フィットネス	20人	17人	８人	２人	本学アリーナ
３回（48回）	2022年12月11日	お正月遊び	７人	５人	８人	３人	ミナテラスとちぎ

第46回　親子遊びの会

活動の概略

１．日　時：５月７日（日）10時00分～11時30分

２．場　所：本学グラウンド芝生広場

３．参加者：子９名、母５名、父２名、祖母１名、学生11名、教員３名　合計31名
（１歳児１名、３歳児５名、４歳児２名、７歳児１名）

活動の内容と進め方

１．内　容：テーマ「親子で体を使って遊ぼう～子ども忍者に変身～」
・子ども忍者になって体を使って遊ぶような設定。保護者も参加。
・（後半）保護者と教員の懇談。その間、子ども達に対して学生は絵本「そらまめくんのベッド」などの読み聞かせを行った。

２．プロジェクト参加教員：杉本、今村、田所

３．プロジェクト参加学生：（４年生）金子花菜、橋本実咲、長野亜友未
（３年生）海野史帆、小林明日香、高橋のりか、大友歩未、菊池葵
（２年生）西川綺華、竹尾鞠愛、鈴木京香

４．事前準備
打ち合わせ、準備、練習のため計５回集合して進めた。

５．当日のスケジュール

８：30～	学生集合、現地にて準備
９：45～	参加者受付・入室
10：00～10：10	ごあいさつ、忍者体操
10：10～10：50	４つのコーナーを中心に自由に遊ぶ （製作コーナー、新聞紙破り、新聞紙渡り、新聞紙ハードル）
10：50～11：10	ドラムサークル
11：10～11：30	（大人）懇談、アンケート　（子ども）絵本の読み聞かせ
11：30～12：00	解散・片付け
12：00～12：30	学生振り返り

６．活動の振り返り

４年生、３年生が経験を重ねて、温かく下級生をリードできている。計画も事前の準備も自主的に協力し合って行っていた。当日の活動も、子どもへの働きかけを楽しく、心をこめ、かつ安全に行うことができていた。この機会を活かす次の課題としては、学生も保護者と会話をし、さらに交流を深める姿勢を持つことと考える。

保護者同士が車座になり語り合う時間をとることができた。「コロナにより、親子で参加できるイベントなどほとんど無いため、このような機会は貴重」、「外で同年代の子と遊べるのが嬉しい」、「保育者の卵の学生さんと会えて嬉しい」というお話もあった。子育てに関する質問に教員からも答えたが、保護者同士の励ますようなやりとりもあり、子育て支援の場作りの意義があることを感じた。

第47回　親子遊びの会

活動の概略

１．日　時：2022年11月26日（土）10時30分～12時00分

２．場　所：本学アリーナ

３．参加者：10家族（子20人、母10人、父７人）、学生８名、教員２名　合計48名

（０歳３人、１歳３人、２歳３人、３歳４人、５歳３人、６歳４人）

活動の内容と進め方

１．内　容：「親子フィットネス」

・親子でフィットネス（講師：山崎靖子氏）

・おうちでできる親子遊び

・家族同士や学生との交流

・大学と地域の子育てサークルとの協働の試み

２．当日の参加教員：今村、田所

３．当日の参加学生：（２年）西川綺華、竹尾毬愛、村井彩乃、鈴木京香、阿部さとみ

（４年）金子花菜、橋本実咲、齋藤大貴

４．事前準備

保護者代表との打ち合わせ、学内準備、研修、練習など半年間に計10回程度の準備の機会があった。

５．当日のスケジュール

８：30～	学生集合、準備
10：30～	参加者受付
10：40	挨拶、参加者紹介（お名前ハーイ）
10：50～11：50	ふれあい遊び、かけっこ、 サーキット遊び、 パパママフィットネス、 みんなでダンス

11：50～12：00　　和太鼓演奏（齋藤）
12：00～12：10　　写真撮影、アンケート
12：10～12：30　　解散
12：30～14：00　　片付け・振り返り

６．活動の振り返り

宇都宮市内で活動してきた子育てサークルと共同で行い、母親たちと学生とで声をかけあって準備をすることができた。子育て中の方の声を聞く貴重な機会、また地域の方に学生の真摯な姿を知っていただくよい機会になったと考える。当日直前でコロナ関連の事情によるキャンセルが相次ぎ、参加人数が減ったのは残念だったが、参加者には開催を大変喜んでいただいた。

学生は、親子のふれあいをねらいとした運動遊びを安全に行うという１日の経験から学ぶことができたと考える。４年生が優れたリーダーシップを発揮していた。当日参加できなかった学生も準備に参加し、12月11日の「お正月遊び」の会と役割分担するなど協力的な体制で行うことができた。

第48回　親子遊びの会

活動の概略

１．日　時：12月11日（日）10時30分～11時30分
２．場　所：ミナテラスとちぎ（宇都宮市インターパーク6-2-1）セミナールーム
３．参加者：親５人　子７名＋学生８名＋教員３名　合計23名

活動の進め方とタイムスケジュール

１．内　容：テーマ「お正月遊び」
こまやお正月の飾りなど身近な素材を使って親子で楽しむ手づくりコーナー、親子のふれあい遊び、段ボールでできた臼と杵を使ってみんなでお餅つきなど。
２．プロジェクト参加教員：杉本、今村、田所
３．プロジェクト参加学生：（３年生）海野史帆、大友歩未、菊池葵、髙橋のりか
（２年生）竹尾毬愛　（１年生）大貫陽香、村上芽唯、小林歩未
４．事前準備
打ち合わせ、準備、練習のため計４回集合して進めた。

５．当日のスケジュール
９：00　　現地集合、抗原検査
９：30　　会場設営と準備
10：15　　参加者受付
10：30　　開始
11：30　　終了　参加者見送り後、掃除・片付け
12：00　　学生・教員解散

６．活動の振り返り

コロナ関連でのキャンセルを見越して10組の枠に当初13組の予約を受け付けたが、当日のキャンセルも多く、５組のみの参加での実施となった。

今回は４年生から引き継ぎ、３年生が主体となり計画・準備を進めていた。学外の環境で、初めて出会う方に活動を提案する経験はまだ不足しており、事前の予測が十分とは言えなかったが、臨機応援に対処し、親子の笑顔に助けられながら乗り越えていた。毎回のこのような経験が活かされて、学生ひとりひとりや会全体の力になっていくと考える。

本学のプログラムを楽しみにしてくれているリピーターの方も家族で参加されていた。

５．栃木県青少年育成県民会議から「優良青少年団体」として表彰

地域の子育て支援の場づくりを目指しており、特に2020年からのコロナ禍においても、感染対策を講じながら開催を維持していることは、閉塞状況の中、子どもの遊び場に悩む保護者を支える活動になっていると評価された。また、学生有志の活動であり、会の数週間前からの準備にも熱心に取り組んいて、親子の触れ合いから学び、経験者の多くが保育・福祉人材として巣立っている点も受賞の理由となった。

代表 金子花菜さん（左）と副代表 橋本実咲さん（右）

６．活動の振り返りと今後に向けて

活動について学生の振り返りの言葉を聞くと、シンプルに「子どもに触れる機会」「保育を体験できる機会」として会が機能して期待されている部分が大きいことがわかる。上級生から下級生に伝えらる言葉にも「実習に役に立つ」「色々な年齢の子がいるので発達段階がわかる」等があった。保育者志望の学生の体験を増やすひとつの場になっていることは明らかだ。

一方、参加の保護者からは、親子がともに参加できる機会であることを喜び、子育て支援への場が大学内に企画されることを歓迎している声を聞く。

親子遊びの会では、実習でも出会うことは難しい「親子」という単位で会える強みを活かして、会を発展させていけるとよいと考える。子育て中の親がどんなことを思っているのか、どんな支援が必要であるのかを保育志望の学生が考えるきっかけになる機会として活かしたい。

１年生から４年生の多くの学生が志願してボランティア活動に参加していた。しかし、実際に親子に出会える会の回数は少ないのと授業や実習に多忙なスケジュールとの調整から参加できない学生もいる。イベント以外の時間にも地域の親子支援に関わっていると実感できるような活動を創出し、進められるとさらに良いと思われる。

（親子遊びの会　子育てネットワークづくり事業メンバー）

代　表	教　　授	杉本　太平
子ども生活学部	教　　授	河田　　隆
	准　教　授	今村　麻子
子育て支援研究センター客員研究員	非常勤講師	田所　順子
子育て支援研究センター客員研究員	非常勤講師	丸橋　亮子

Ⅴ．自然遊びの会・行事実践報告
～親子ふれあいネイチャー事業～

子ども生活学部　教授　桂　木　奈　巳

１　はじめに

自然遊びの会バーベナでは、2014年より、宇都宮市の「みやの環境創造提案実践事業」において提案した事業の一環として、年に２～４回の頻度で大学内の子どもの森において、「自然遊びの会」を実施してきた。各回ともに何らかの形で生物多様性を取り上げ、その季節に合うプログラムを検討し、親子を対象に実践を行っている。

2022年度は、昨年に続きNPOうつのみや環境行動フォーラム・生物多様性部会（以下、環境行動フォーラムと略す)、「親子ふれあいネイチャー事業」として行事の合同開催を行なった。なお、８月の行事はコロナウイルス感染症の蔓延により中心とした。

２「親子ふれあいネイチャー事業11月」の実施

２－１　実施の概要

実施の概要を表１に示す。環境行動フォーラム側は集客と参加者への連絡及び当日の受付や救急関係、バーベナ側はプログラムの検討を含めた行事の実施を担当した。なお、行事の開催にあたり、本団体で作成したガイドラインを元にコロナウイルス感染症対策を講じた。

表１　行事実施の概要

実施日時	2022年11月26日（土）　10：00～12：00
実施場所	宇都宮共和大学内　子どもの森・アリーナ、図工室
学生スタッフ	４年：建　優寧、大槻　友里 ３年：海野　史帆、立川　ひかり、生出　梨紗、大塚　春生 ２年：山口　桂汰、根本　桃華（統括)、仲山　日菜（統括）
プログラムの内容	①虫くいをさがせ　②むしむしびんご　③タペストリー作り
参加者数	参加者　24名（保護者12名、子ども12名）

２－２　活動の様子

この回は、３年生を中心に活動を行った。４年生の細やかな配慮により、運営は順調であった。資料１に活動の様子を示す。

資料１　活動の概要（バーベナのサイトより抜粋）

定例イベントを実施しました。NPOうつのみや環境行動フォーラム様との共催でした。

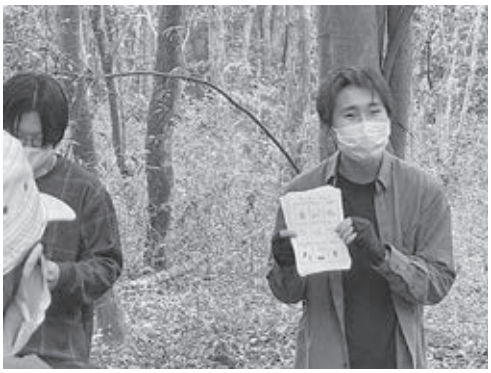
まずは「虫くいを探せ！」。「虫くい」された葉っぱや木の実をたくさん探します。一番多く探せた子が「虫くいキング」になれます。

次は「むしむしビンゴ」。「みどりのむし」「８ほんあし」など、自作のビンゴカードを元に色々な「虫」を探します。虫たちはすでに冬越しの準備に入っていました。「ザトウムシ」や「ツユムシ」等、身近な虫たちが見つかりました。

最後に室内で「タペストリー作り」を行いました。学生さんが、森に育つ植物を加工して繊維にし、これを織り込んで行く活動です。クワ、ミツマタ、コウゾ、クズ、ケナフ等を使いました。似たような感じになるかと思いきや、植物によってかなり質感や色が違っていました。ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。

○虫くいをさがせ！
「こんなのあったよ！」

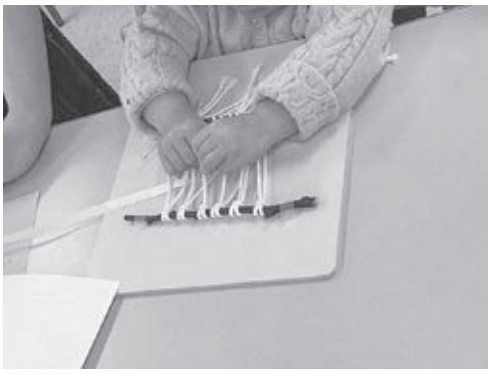
みつけた「むしくい」の見せあいっこで



○むしむしびんご
「むしむしびんごカード」森の中で虫探し

恒例の丸太の下の虫さがし。見慣れないカタチの虫がうじゃうじゃ。

○タペストリー作り
室内で製作。自然物で作った糸を織り込みます

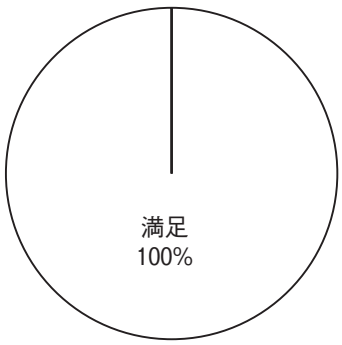
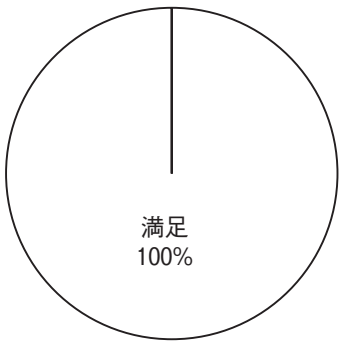


手先の運動になります。集中力・持続する力も必要な活動です。

２－３　参加者の反応

資料２に参加者（保護者）に依頼したアンケート結果の一部を示す。参加者の満足度は高い。今年度の傾向としては、内容に対する感想が多く見られる。初めて参加する家族は学生が子どもとよく遊んだり丁寧な対応に関心が向くようである。しかし、今年度はリピーターが増えつつあり、プログラムの内容に目が向いたと思われる。

資料２　アンケート分析および評価

<table>
<tr><td rowspan="2">参加者の反応・アンケート結果より</td><td>Ｑ１）講座内容はいかかでしたか？
 
</td><td>Ｑ２）スタッフ対応はいかかでしたか？
 
</td></tr>
<tr><td colspan="2">• 皆さんとても優しく、また虫について詳しく知れてとても良かったです。虫ハカセすごい！！おもしろかったです。虫に優しくしたいです。
• 子どもは興味津々で虫探しは非常におもしろかったです。春や夏にも活動してみたいです。安全についてやコロナ対応の説明があったりと、とても対応が良かったです。子どもに色々と体験、経験させることができる非常に良い機会でした。
• 普段気にしていない落葉の中に、様々な発見がありました。虫探しみたいで楽しかったです。丁寧に子ども目線で接していただきました。
• 雨が降ってきてしまったが、外での活動ができてよかった。むしむしビンゴやタペストリーづくり、子どものことを考えてくださり楽しかった。みなさん優しく気さくに話しかけてくれた。
• なかなか林の中に入る機会がないので楽しかったです。優しく色々教えて下さいました。虫さがしがおもしろかった。声がもう少し大きいといいです。一つ一つのプログラムの時間が長い。もう少し短くして、あと一つ別のプログラムを入れてもいいかなと思いました。</td></tr>
</table>

３　おわりに

本活動は「みやの環境創造提案実践事業」の取り組みの一つであり、事業に応募したテーマにそう内容でプログラムを検討し、これを参加者に体験いただいている。ここでの内容は事業の成果として報告を行っている。スタッフとして参加している学生は、参加者に対応する際に、自分自身で見つけたお気に入りを紹介する場面も見られる。学生たちは月に１度ではあるが、森の整備を行っており、森の状態に詳しく、この利点が表れているといえる。今後も整備と行事を連携させた活動を継続したい。

Ⅵ．地域産学官連携活動報告

Ⅵ－１．大学地域連携活動支援事業「親子遊びの会」

子ども生活学部　准教授　今　村　麻　子

１．活動の趣旨

令和４年度は、特に地域の子育て家庭との繋がりを育てることを目標として活動を行った。核家族の多い現代、親と子が閉塞的な環境にあることも心配される状況に、コロナは拍車をかけた。親同士の自助グループ「子育てサークル」も活動場所を失ったり、参加者が減って活動を縮小したりている例が多いと聞いた。そのような中で、「栃木県大学地域連携活動支援事業」の助成を受けて、大学生または大学ができる地域貢献を模索し、子育てサークルと活動をご一緒させていただくことができた。それは、保育を学ぶ学生にとって、子育て家庭や社会と関わる貴重な体験となった。

２．活動の実績

今年度の親子遊びの会の活動のうち、大学地域連携活動支援事業に関わる活動を表１に示す。

表１　令和４（2023）年度の栃木県大学地域連携活動支援事業活動実績

事業名	事業の実施内容	事業の成果
学生＆子育てサークル共同会議	7/21、10/22 本学にて、学生代表と子育てサークルKodomomフィットネスの代表者、教員での打ち合わせを行った。	11/27の親子フィットネスイベントに向けた打ち合わせを行うとともに子育て期の親のニーズのヒヤリングも行うことができた。地域のサークルとの繋がりが生まれた。
連携のためのイベントチラシ作成と配布	９月に行われる予定の市内子育てサークル代表者会議に配布する活動内容の案内とイベントのチラシを宇都宮市役所子ども部保育課に送った。	コロナの状況により、対面での代表者会議は中止となったが、チラシは各子育てサークルへ送信いただけた。会の取り組みを地域に周知できる機会となった。

勉強会「子育てサークルと地域・大学との連携可能性について」	8/19本学にて研修「子育てサークルと地域・大学との連携可能性について」を実施。 講師（村山久美氏）はオンラインにて講義。子育てサークルの概要や意義、地域との関わりの様子や課題についての講義。大学生との連携への期待も伝えられた。	ボランティア学生９人、教員２人、子育てサークル代表者１人が一緒に研修を受け、子育てサークルがどのようなものか、地域の子育て支援に大学生がどのように関われるかを学ぶことができた。
練習会「親子フィットネス練習会」	8/27本学にて「親子フィットネス練習会」を実施。講師（富田悦子氏）から、親子のふれ合い遊びを伴うフィットネスの方法についての演習を体験する。	ボランティア学生13人、教員２人が11/27開催のイベント本番を安全に行うための練習を行うことができた。子育てサークル代表者はオンラインにより自宅から参加。
大学地域連携支援事業中間報告会	10/13県庁にて中間報告 発表者：金子花菜、橋本実咲	子育てサークルの意義についての質問を受けるなど、講師や参加者から関心が寄せられた。
（地域への報告）大学コンソーシアム発表	大学コンソーシアムとちぎ主催学生発表コンテスト「学生＆企業研究発表会」に参加。11/12～21動画配信オンデマンド。11/16質疑応答。 発表者：金子花菜、橋本実咲	親子遊びの会の取り組みを地域に発信することのできる機会となった。鹿沼相互信用金庫理事長賞受賞。
第２回親子遊びの会イベント	11/26本学体育館「親子フィットネス」イベントを開催。 親子が一緒に体を動かせるフィットネスを中心としたプログラムを実施した。 ダンス、サーキット、かけっこ、和太鼓演奏等。パパママフィットネスの間は学生が子ども達と遊び、安全を見守る。	10家族（子20人、母10人、父７人）、学生８人、教員２人　参加者計48人。学生と地域の父母が協力してひとつのイベントを成功させることができた。０歳から６歳までの子ども、親同士が交流することができた。
第３回親子遊びの会イベント	12/11地域コミュニティ施設ミナテラスとちぎにて「お正月遊び」イベントを開催。こまやけん玉、お正月飾りを親子で手作りするワークショップ。子どもたちがお餅つきごっこも体験する。	４家族（子７人、母４人、父１人）、学生８人、教員３人　参加者計23人。コロナ蔓延により当日欠席多数だったが、安全に行い、参加者には遊びの場があることを喜んでいただいた。

（学内への報告）学内報告会	1/6学内報告会開催。 発表者：金子花菜、橋本実咲	参加者約50人。地域の子育て活動に参加したいと考える新しい学生ボランティアの掘り起こしも行うことができた。小山市の多胎児支援サークルの方の見学もあった。
（情報収集・調査）東京おもちゃ美術館視察	1/7東京おもちゃ美術館を学生２名、教員１名が視察。乳児を対象とする部屋や各コーナー見学した。玩具製作のワークショップに参加した。	「赤ちゃん木育ひろば」等乳児の親子が安全に穏やかに過ごす環境づくりを見ることができた。親子で遊ぶことのできるワークショップのテーマや準備の情報収集ができた。
「親子遊びパンフレット」作成	親子遊びの会、地域の子育てサークルへの参加に興味を持ってもらえるような内容。親子でできる遊びのヒントを載せ、手に取りやすくした。	800部を印刷した。２月完成後、地域の方への配布を予定。
成果報告書作成	令和４年度の会の計画や実績を記録し、次年度以降に続ける際の資料となる内容とした。	90部印刷製本。
大学地域連携支援事業成果報告会	2/6県庁にて成果報告。 発表者：金子花菜、橋本実咲	

３．連携団体

子育てサークル「kodomomフィットネス」

代表　武内　麻衣

４．成果目標に対する達成状況

	成果目標	達成状況
1	地域連携活動イベントを２回実施	親子遊びの会イベントを11/26、12/11の２回開催することができた。そのうち１回は子育てサークルの母親・父親との協働を実現することができ、計画段階から密な情報交換を行い、当日も役割分担をして実施することができた。来年度以降は､｢双子サークル」など連携する子育てサークルを増やしていきたいと考えていたところ、全県で多胎支援の活動を進めたいというグループとも繋がりを持つことができた。 コロナの影響があり、各回の参加者は予約があっても当日の参加数は減ってしまう傾向があったが、各回、子ども10人～20人、その親５人～17人、学生８人～11人、教員２人～３人で、参加者20人～50人程度のイベントを実施することができた。
2	パンフレット「親子遊びのヒント集」を作成	800部を作成。これまで学生が見た親子の反応等を反映し、おすすめの遊びを盛り込むことができた。また「子育てサークル」の概要紹介も入れることができた。完成が２月となったため、各方面への配布は今後となるが親子遊びの充実を支援するとともに、子育ての仲間づくりのヒント等の情報提供の際のツールとしたい。
3	学生の参加30名	イベント当日の参加だけでなく、準備にあたるなど30人程度の学生が熱心に企画、実施、調査等の活動に参加した。地域の「子育て支援」への関心や子ども理解を深め、保育士・幼稚園教諭として子育て支援の実践力を蓄える活動になったと考える。

５．実施した内容

本事業の内容の一部を成果報告会における発表内容と作成したパンフレットの紹介により報告する。

（１）大学地域連携活動支援事業成果報告会

期　日　平成５年２月６日

場　所　栃木県庁本館６階　大会議室１（栃木県宇都宮市塙田１－１－20）

発表者　金子花菜・橋本実咲

宇都宮共和大学
親子遊びの会
地域の子育てサークルとの
連携の試み

1

親子遊びの会とは

- 参加者は、**地域の子育て家庭**で、子どもの年齢は主に0歳～6歳。
- 学生は、**自主的に参加している1年生～4年生**。
- 親子で遊ぶイベントの開催などを行う。
- **学生は、活動の計画と準備，当日の運営，遊びの支援**を行う。

2

2022年度の活動方針

今年度の活動テーマ　『**地域に寄り添う**』

宇都宮市内の子育てサークルと連携し、新たな地域ニーズを掘り起こし、活動拠点化を目指して活動する

3

子育てサークルとは

○主に居住地近くで、未就園児を子育て中の保護者が定期的に集まり、自主的に企画・運営・活動しているグループ

○親子の遊びや季節の行事を楽しみ、子育ての相談や情報交換をし互いに支え合いながら、地域で一緒に子育てを行っているグループ

子育てサークル代表

4

子育てサークルと共同会議

5

2022年度の活動

1	5/7	親子イベント「忍者ごっこ」
2	6/30	子育てサークルの保護者と共同会議①
3	7/21	子育てサークルの保護者と共同会議②
4	8/19	「子育てサークル勉強会」共同研修会実施
5	8/27	「親子フィットネス練習会」共同研修会実施
6	10月～	親子活動啓蒙パンフレット作成
7	11/26	親子イベント「親子フィットネス」
8	12/11	親子イベント「お正月あそび」
9	1/7	東京おもちゃ美術館　研修

6

8月　研修会

いちごmama　　村山久美　講師

〈地域の現状〉
- 現代の日本では、孤独の「孤」の「孤育て」を行う家庭が増加している。
- 「孤育て」を行う親を外の世界へとつなげることが求められる。親もとっても多くの人や育児観に触れる機会が大切。

〈子育てサークルから大学生にお願いしたいこと〉
- 子どもにとって「大好きな大人」であってほしい

7

11月26日
イベント「親子フィットネス」実施

8

当日の流れ

1. はじめの言葉
2. おへんじハーイ
3. ふれあい体操
4. シーツブランコ
5. よーいドン
6. サーキット
7. パラバルーン
8. ママフィットネス
9. ダンス
10. 和太鼓演奏
11. おわりの言葉

9

親子フィットネス①　はじめの言葉

10

親子フィットネス③　ふれあい体操

11

親子フィットネス④　シーツブランコ

12

親子フィットネス⑤　よーいドン

13

親子フィットネス⑥　サーキット

14

親子フィットネス⑦　パラバルーン

15

親子フィットネス⑧　ママフィットネス

16

親子フィットネス⑩　和太鼓演奏

17

製作

松ぼっくりツリー

カップ

フォトスポット

18

イベントの参加者

〈参加人数〉

子ども	20名	学生	9名
母親	10名	教員	2名
父親	7名		
		計	48名

満足度100%

〈アンケート　自由記述〉

- 笑顔で遊んでいる子どもたちをみていやされた
- 子どもたちの目がキラキラしていた
- まだはいはいもできないけどいい刺激になった

19

子育てサークル代表から

〈サークルの現状〉

コロナ禍となり、開催場所の確保，乳幼児の適切な感染対策，人員の確保が難しく、イベントの企画には手が足りないとい現状でした。また、当日に自分の子どもを見ながら運営していくことは大変そうだと思いこのお話があるまで、開催に踏み切ることができませんでした。

〈連携の意義〉

開催会場の確保，打ち合わせ場所の確保，当日人員の確保が格段に早く確実に行うことができました。学生さんたちから多方面のアイデアや発想を受けることができ、制作物や計画書等を共に進め負担を分散させ、形にできることは大きな意義です。

20

<連携での期待>

大学という大きな施設を使用させてもらえることにとても感動しました。打ち合わせの場所があること、学生さんの意見や手を借りられることがとても心強かったです。

子育てママは、特にコロナ禍で家庭にこもりがちになっています。パパが忙しいと大人と話さないまま一日が過ぎることもあり、社会から取り残されてるのではないかという不安が漠然と出てきてしまうものです。私も第一子出産後４ヶ月くらいは、気軽に外出もできずそのような状態でした。このようなイベント開催が定期的にあることで私のような孤立感や焦燥感を抱えたママたちが少しでも気軽に外に出ることができ、子育て支援の敷居がぐっと下がっていくことを期待しています。

21

12月11日 イベント「お正月あそび」

当日の流れ

1　製作活動
　コマ，けん玉，お正月飾り
2　ふれあい遊び
　いっぽんばし，お寺のおしょうさん
3　もちつきごっこ
4　もちつき体操

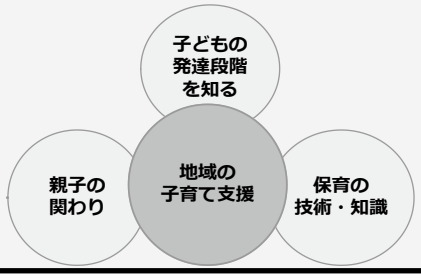
22

1月7日　研修 東京おもちゃ美術館

引用：おもちゃ美術館　公式HP

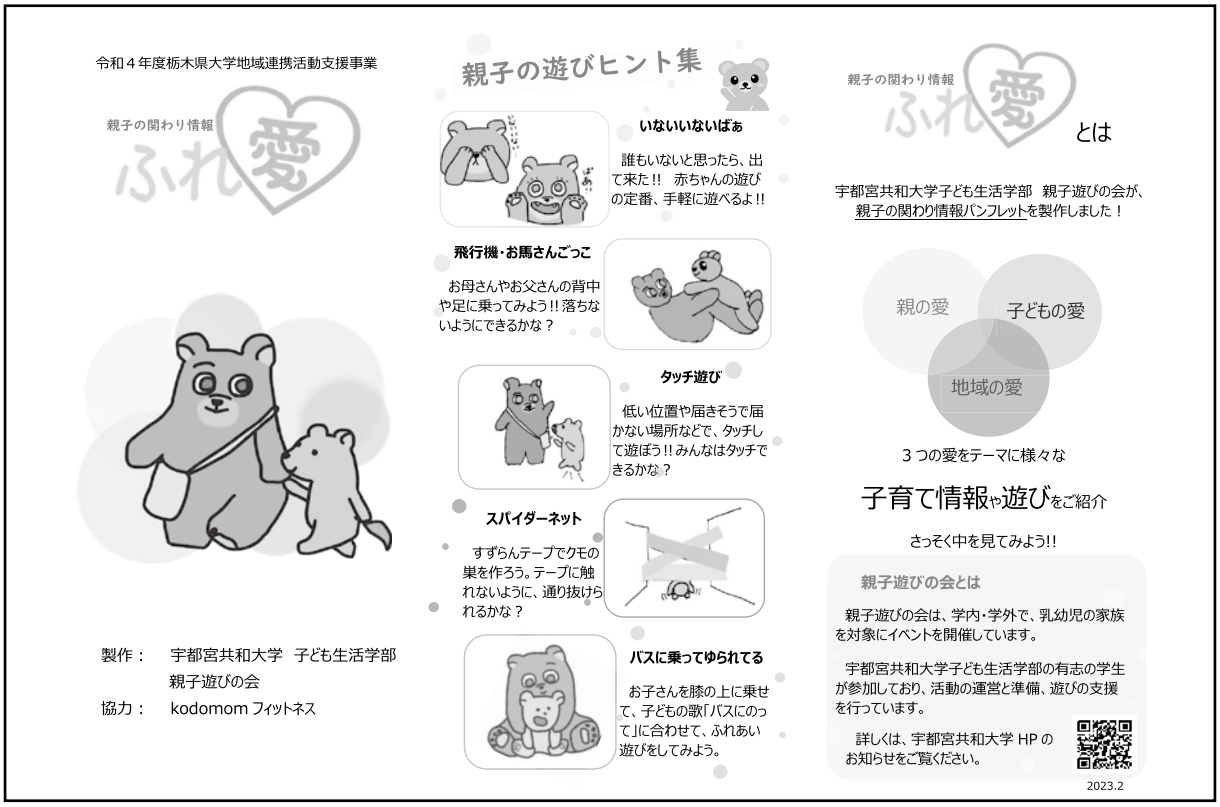
23

学生にとっての学び



24

（2） パンフレット「親子遊びのヒント集」（三つ折り）



令和４年度栃木県大学地域連携活動支援事業

親子の関わり情報 ふれ愛

製作： 宇都宮共和大学 子ども生活学部 親子遊びの会

協力： kodomom フィットネス

親子の遊びヒント集

いないいないばぁ

誰もいないと思ったら、出て来た!! 赤ちゃんの遊びの定番、手軽に遊べるよ!!

飛行機・お馬さんごっこ

お母さんやお父さんの背中や足に乗ってみよう!! 落ちないようにできるかな？

タッチ遊び

低い位置や届きそうで届かない場所などで、タッチして遊ぼう!! みんなはタッチできるかな？

スパイダーネット

すずらんテープでクモの巣を作ろう。テープに触れないように、通り抜けられるかな？

バスに乗ってゆられてる

お子さんを膝の上に乗せて、子どもの歌「バスにのって」に合わせて、ふれあい遊びをしてみよう。

親子の関わり情報 ふれ愛 とは

宇都宮共和大学子ども生活学部 親子遊びの会が、親子の関わり情報パンフレットを製作しました！

親の愛 子どもの愛 地域の愛

３つの愛をテーマに様々な

子育て情報や遊びをご紹介

さっそく中を見てみよう!!

親子遊びの会とは

親子遊びの会は、学内・学外で、乳幼児の家族を対象にイベントを開催しています。

宇都宮共和大学子ども生活学部の有志の学生が参加しており、活動の運営と準備、遊びの支援を行っています。

詳しくは、宇都宮共和大学 HP のお知らせをご覧ください。

2023.2

パンフレット（表）

地域の愛 子育てサークルって？

子育てサークルは、主に子育てをしている親子が集まり、一緒に遊んだり、保護者同士で子育てについて不安や悩みを打ち明けたりして、**子育て中の親子がリフレッシュできる場所**として活動しています。

活動内容や開催日時は、サークルによって様々ですが、季節の行事・親子のふれあい遊び・保護者同士の交流会から、クッキングや工場見学などをしているサークルもあります。

会費は、無料のところも、月額 100～200 円、年額 2000 円などを分担するグループもあります。

子育て中で、外に出かけるのが心配という方も、大丈夫!! ここに集まるのは子育て中の親子です。先輩ママさん達の知恵をたくさん受け取れるチャンスになるよ!!

子育てサークルは、子育て中の親が自主的に運営しているところと、ボランティア等によって運営せれているところがあるよ！

栃木県にも様々な地域にあるから、検索して探してみよう!!

とちぎの子育て情報サイト

親の愛 子どもの愛 赤ちゃんの遊びって？

赤ちゃんの遊び＝触れること

赤ちゃんは様々な物を手や舌で触れ、どんな物なのか探りながら遊んでいます。これは、物だけでなく、人に対しても同じです。そのため、**赤ちゃんのふれあい遊びは、赤ちゃんが人を知る遊びであり、保護者と親密な関係をつくる遊びなのです。**

そんな、ふれあい遊びを紹介!!

ふれあい遊び 一本橋 こちょこちょ

いっぽんばし こちょこちょ

→手のひらに指を一本で触る くすぐる

すべって たたいて つねって

→指を滑らせ 優しくたたいて 少し摘まむ

かいだん のぼって

→二本の指で肩の方へ登る

こちょこちょ

→脇の下などをくすぐろう!!

親の愛 子どもの愛 親子で作って遊ぼう!!

紙コップロケット

① １つの紙コップの飲み口に４等分の切り込みを入れる。

② 輪ゴムを結ぶ。

③ 飾りを付けたら、輪ゴムを付けた方を上に乗せて…

④ 結んだ輪ゴムを図のように切り込みに差し込む。

ションー

準備する物

紙コップ ２個
輪ゴム ２個
はさみ

ペットマラカス

作り方は、空のペットボトルに好きな物を入れるだけ!!

ビーズやおはじき・お米、どんぐりなど、入れて音の違いを楽しもう!!

ふらふら おはじき ビーズ

準備する物

空のペットボトル

ビーズなど中にいれる物

パンフレット（裏）

６．おわりに

親子遊びの会では、子育て支援に関わりながら学生への教育効果も期待できるとしているが、この期間の４年生メンバーのリーダーとしての成長は特筆に値すると考える。精力的に活動を推し進めながら、常に下級生に温かく声をかけ、モデルを示してくれていたと感じる。

また、本活動に賛同し、子育てサークルの運営者、参加者の方、講師の方々が学生とともに活動してくださった。このような試みの一歩は、今後さらに大学と地域が手を取りながら地域の親子を支援する活動へと発展すると期待したい。

令和４年度栃木県大学地域連携支援事業「親子遊びの会」メンバー

宇都宮共和大学子ども生活学部　４年　金子　花菜
橋本　実咲
長野　亜友未
３年　小林　明日香
海野　史帆
中島　彩
齋藤　理桜
田村　千愛希
橋本　佳奈
髙橋　のりか
菊池　葵
大友　歩未
利根川　沙希
２年　根本　桃華
西川　綺華
竹尾　毬愛
鈴木　京香
阿部　さとみ
村井　彩乃
竹井　愛美
齋藤　優佳
山田　知笑
三上　海桜
下山　ひかる

Ⅵ－2．大学コンソーシアムとちぎ第19回学生＆企業研究発表報告

大学における子育て支援
―地域に寄り添う子育てサークルとの連携の試み―

宇都宮共和大学子ども生活学部親子遊びの会
金子　花菜、橋本　実咲、長野　亜友未、
大友　歩未、菊池　葵、髙橋　のりか

【概　要】 宇都宮共和大学子ども生活学部における子育て支援活動「親子遊びの会」の実践研究について報告する。親子が楽しめるイベントの改善をくり返すなかで、①親子ともに充実する支援内容、②子どもの自己表現を促す活動、③安心できる受容的な働きかけが重要であることが見出された。また、活動の提供が、学生にとって保育実践の学びとしての意義があることが分かった。

【栃木を元気にするには】 宇都宮市の子育てサークルと連携し、保護者や子どものニーズを学ぶ→子育てサークルの保護者と遊びのプログラムを開発する→親子がともに笑顔で楽しむ・子どもと学生が遊ぶ間安心して相談ができる一活動を通して学生は環境構成、教材研究、子どもの援助を学ぶ→実践力をつけて保育者として現場に出ることができ、地域の親子に還元できる。また、子育てサークルなど地域交流を強化し本大学が保護者にとって憩いの場になる。この循環が地域の子ども・保護者・保育者から栃木を元気にすると考える。

１．「親子遊びの会」の意義と目的

宇都宮共和大学「子育て支援研究センター」事業のひとつである「親子遊びの会」（以後、本会）では、子どもの遊びの支援、親子関係の支援、家族同士の繋がり作り支援を目的にさまざまな遊び･活動を行っている。本会は、教員のサポートや助言をもとに、学生スタッフが主体的に活動スケジュールや環境構成、制作等に携わり、実際の運営も行い、直接、子どもと保護者への関与も経験できることで、学生の保育実践力やコミュニケーション能力などの養成に繋げることも、本会の目的となっている。

２．本会の概要

参加者は、地域の子育て家庭であり、子どもの年齢は主に０歳～６歳である。活動は、親子で過ごす時間、保護者と教員の懇談、子どもの遊びの時間で構成される。親子で過ごす時間には活動のテーマを設け、学生は活動の計画と準備、当日の運営、遊びの支援を行う。学生は、自主的に参加している１年生～４年生である。

３．昨年度活動実績

昨年度の活動実績は、以下の通りである。

第１回　5/8　親子イベント
「アスレチック」
場所：宇都宮共和大学長坂キャンパス

第２回　7/25　親子イベント
「リトミック」
場所：トヨタ本社

第３回　11/25　親子イベント
「忍者ごっこ」
場所：ミナテラス

第４回　12/19　親子イベント
「お正月遊び」
場所：ミナテラス

第５回　1/23　親子イベント
「リトミック」
場所：ミナテラス

第６回　3/6　親子イベント
「リトミック」
場所：ミナテラス

４．本研究の目的

本会では、毎活動の満足度が高いことや情報の発信力の低迷からリピーター率が高い。また、感染症の拡大から地域との連携が薄れているよう思われ、以下の目的を設定した。

①子育サークルと連携し、保護者と子どものニーズがどのように変化しているのか。

②親子のーズに適した活動を運営するためにはどうすればよいのか。

③子どもが主体的に遊び、親子で楽しむために、学生が行うべき援助、配慮とはどのようなものか。

この３つの目的について、プログラムの検討、教材研究及び実践と省察により明らかにする。

５．方法

（１）子育てサークルとの連携

2022年度の活動テーマを『地域に寄り添う』とし、地域の子育て支援団体・サークルなどとも連携し、地域の子育て支援ニーズを掘り起こしつつ、本学が地域の子育て支援の拠点のひとつとして役割機能を充実せることを目指している。具体的には、宇都宮市の子育てサークル『Kodomomフィットネス』と連携し、共同研修を重ね、地域のニーズに適した活動、環境構成、教材などを検討し、親子が主体的に参加し、楽しめることを目標としたイベントを計画・実施する。

（２）実践

今年度は３回の親子イベントを計画・実施する①5/7「忍者ごっこ」②11/26「親子フィットネス」③12/11「お正月遊び」である。またそれらに付随して地域子育てサークルの保護者と共同会議や共同研修（8/19，8/27）を行う。

（３）省察

活動後に毎回ミーティングを行い、学生、教員が実践について検討・考察を行った。

６．結果

（１）第１回活動実践

ここでは５月の活動について報告する。第１回の活動のテーマは、『忍者ごっこ』であった。「親子でなりきり遊びを楽しむ」をねらいとし、芝生のうえで忍術に見立てた新聞紙遊びや体操を行った。コーナー遊びとして、４つの遊びを学生が考え実践した。

ａ．新聞紙渡りコーナー

芝生の上に置かれた大きさが様々な新聞紙の上を渡る。始めは緊張から保護者に抱きついていた女児が、保護者の「あそこのコップの絵を渡ってみよう」という声かけにより一緒に挑戦したことで、段々と笑顔になり主体的に取り組む姿が見られるようになった。

b．新聞紙ハードルコーナー

筒状になった新聞紙をジャンプして飛び越える。（写真１）年齢によって、学生が持った筒状の新聞紙をジャンプしたり跨いだりして挑戦する姿が見られた。また、学生や他児が楽しそうに遊んでいる姿を見て「私も先生役やりたかった」など学生の役割に興味を持った子どももいた。

c．新聞紙破りコーナー

学生が広げた新聞紙に手をグーにして腕を前に振ることで、半分に破る。製作コーナーで作った新聞紙の剣を使って、破くことに挑戦する姿が見られた。イベントに参加した最年少の子どもが、広げられた新聞紙に向かって走ったり破いた新聞紙を丸めたりして学生と遊ぶ姿が見られた。

d．製作コーナー

事前に画用紙で鉢巻を製作し、子どもが保護者と折り紙を貼るなど飾りつけを行い自分だけの鉢巻を製作する。また、新聞紙の剣を作り学生と遊ぶ。（写真２）剣を製作した女児が､「お姉さん､行こう！」と一緒に剣を作っていた学生を誘い、遊ぶ姿がみられた。その姿を見て他児がその遊びに興味を持ち「私も欲しい！」と学生と一緒に製作する姿が見られた。

（写真１）
新聞紙ハードルコーナー

（写真２）
製作コーナー

（２）子育てサークルとの連携

子育てサークル『Kodomomフィットネス』の保護者代表と打ち合わせを行った（写真３，４）（6/30，7/21）。そのなかで、現在の保護者のニーズを伺い、子育てや宇都宮市の子育て家庭が利用しやすい施設情報を掲載したパンフレットの製作を共同で行うこととなった。また、11月に親子フィットネスイベントを開催する運びとなった。現在は、イベントに向けて打ち合わせを重ねている。

（写真３）
第１回打ち合わせ

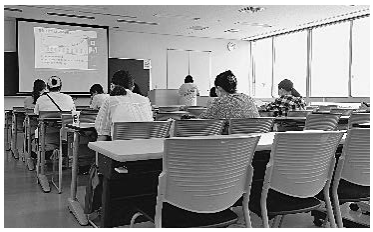
（写真４）
第２回打ち合わせ

（３）共同研修

今回、初めての子育てサークルとの連携であるため、その目的を全体で共有し、結束力を深めることもねらいとし、８月に共同研修を２回行った。11月に開催予定である親子フィットネスについて、どのようなサポートが必要であるか共有することを目的とした。（写真５）

①『子育てサークルの意義と課題』：８月19日（金）に子育てサークルいちごmama代表・東京立正短期大学非常勤講師である山村久美講師に依頼し、現代社会の変化による保護者のニーズの変化や子育てサークルと大学が連携する意義について研修を行った。現代の日本では、少子化や都市化、核家族化、関係の希薄化によって「孤育て」を行う家庭が増加している。「孤育て」を行う保護者のなかには、現在の「まち」へ移住してきたばかりで「まち」の社会資源を利用できていない人が多い。また、家族のなかで育児観が異なり自身の育児観を理解してもらえず不安を強めている人が多い。そのため、「孤育て」を行う保護者を外の世界へとつなげ、多くの人や育児観に触れ、地域で子どもを育てる「まち保育」によって「子育て」を行うことができるようにすることが重要である。子育てサークルや大

学は、「子育て」を行うきっかけとして協力し、情報の発信・イベントの運営・サポート体制の構築を行っていく必要がある。私たち学生は、「まち」の大学で保育を学び、「まち」の社会資源を利用する市民である。だからこそ、保護者の目線に立った情報を伝える発信力や親子で楽しめるイベントを運営する力がある。その力を存分に生かし、「まち」を育てていくことができる。



（写真５）
オンライン研修

②『おやこフィットネス練習会』：８月27日（土）に、ここふぃっと主催である富田悦子講師に依頼し、親子フィットネスを体験することで、親子にどのような効果がありサポートが必要となるか情報共有を行った。今回参加した学生は、全員が親子フィットネスを初めて体験する。そのため、11月開催予定のイベントへ向けて、親子フィットネスの環境構成や保護者が気をつけていること、学生がどのようなサポートをするべきか学んだ。（写真６，７）

（写真６）
童謡にあわせて親子体操

（写真７）
タオルブランコ

７．考察

今年度前半の活動から、子育て支援を行うためには、まず学生が「まち」すなわち「地域」について関心を持つことが大切である。子育てサークルと連携することで、地域の親子のニーズに寄り添った情報提供やイベントの開催を行うことができる。子育てサークルのイベント運営方法について学ぶことは、本会だけでなく、保育の計画や準備、運営、遊び支援を学ぶことになり、学生にとっても大きな意義がある。

８．結論

本会は、子育てサークルと連携したことで、子どもの発達支援、保護者支援、親子の関係性支援としての効果がより強まると推測する。学生は、親子フィットネスについて実践的な学びを得ることができた。また、パンフレット製作を通して、親子のニーズに適した情報について学ぶことができるといった地域人材育成の効果があると考える。親子に寄り添った活動が充実するプログラム開発を行うことは、親子にとってもメリットであり、学生にとってもメリットがあることが分かった。

９．今後の課題

地域の子育てサークルとの連携をより深め、地域の親子に寄り添ったプログラム開発に向けて打ち合わせを重ねたい。そのプログラムが親子にとってよりよい活動に繋がるよう、学生同士の連携を深めていきたい。また、親子の遊びや子育て情報、開催予定のイベントを記載したパンフレットなどを製作・配布し、情報発信力の向上を目指していきたい。

Ⅵ－３．宇都宮市環境学習センター事業報告

子ども生活学部　教授　桂　木　奈　巳

１　はじめに

自然遊びの会バーベナでは、2020年度より「環境学習センター事業」として、宇都宮市環境学習センターにおいて自然遊びの行事を受託している。環境学習センターでの行事の実施は、宇都宮市環境出前講座として受託していた頃を含めると６年目になる。本行事は、NPOうつのみや環境行動フォーラムとの協働で実施しているが、市の環境課題の一つである「生物多様性」を前面に出すことが求められている。行事の開催は毎年同じ場所であるが、学生が入れ替わると視点が異なる利点を活かし、毎年、定番プログラムに若干の改良を加えて継続している。2022年度は７月と１月の２回の行事を実施した。

２「親子で楽しく自然体験in環境学習センター７月」の実施

２－１　実施の概要

実施の概要を表１に示す。スタッフとなる学生の大半は、行事を数回体験しているため、実施場所をよく知っている。そこで、負担減のため、今回は学生の下見は実施しなかった。大学内での準備の他、リハーサルは当日の朝に現地で簡単に実施した。

行事の周知は「市報うつのみや」にて行い、受付は環境学習センターが対応した。受付当日に定員を超える申し込みがあり、人気の講座となっている。

表１　行事実施の概要

実施日時	2022年７月30日（土）10：00～12：00
実施場所	クリーンパーク茂原東側林地
学生スタッフ	４年：建 優寧、大槻 友里、河又 未空，長野 亜由美 ３年：海野 史帆、立川 ひかり、安藤 茜、小池 佑佳、生出 梨紗、 大塚 春生 ２年：根本 桃華、山口 桂汰、仲山 日菜、坂本 有偉 １年：山本 侑奈
プログラムの内容	ノーズ　②昆虫採集　③生き物美術館　④虫のランプ
下見	７月10日（土）10：00～11：30
参加者数	38名（保護者18名、子ども20名）

２－２　活動の様子

当日の活動の様子を資料１に示す。当日は厳しい暑さの中での開催となったが、熱中症等はなく終了した。

資料１　活動の概要(バーベナのサイトより)

宇都宮市環境出前講座「親子で自然体験　in　環境出前講座」を実施しました。

恒例となりました、環境学習センターでの行事を行いました。まずはネイチャーゲームの「ノーズ」で、カブトムシ・セミ・ヘビのクイズをしました。

次の恒例となりました「昆虫採集」です。カブトムシやクワガタムシの様な人気の虫はいませんが（いるのですが、捕まらないですね)、バッタやコオロギ等、子どもたちでも捕まえやすい虫たちがいました。今年は、虫探しの目当てとなる自作のパネルを見えるところに掲示しました。

今年も密回避のため、採取した虫たちは「虫の美術館」（ネイチャーゲーム・森の美術館）として、家族単位で「お気に入り」を展示いただき、それを皆で見て回るスタイルとしました。

後半は「虫のランプ」。当初は虫の足跡を使う予定でしたが、虫への負担大のため、断念。代わりにフィルムに印刷した「虫の羽」を使いました。

コロナ渦ですが､どうにか今まで継続して行事開催ができております｡環境学習センターさまのご協力のもと、行事自体は無事終了いたしました。

○ノーズ

このフィールドで見られる生き物のクイズです。毎年２年生が担当。元気にがんばってくれました。

○虫取り

お待ちかねの虫取り。今年もトマトパックや捕虫網を配り、敷地内で自由に探してもらいました。

○虫の美術館

今年も捕まえた虫たちは、「虫の美術館」として、展示し、みんなで見て回るスタイルとしました。生き物には、お名前（題名）がつけられています。

○虫のランプ

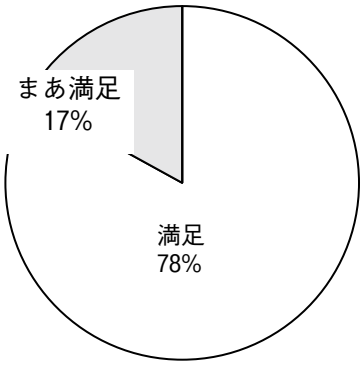
家族毎に､虫の羽（印刷）を使って「虫ランプ」作り。虫の羽ってとてもキレイ。これを暗闇でライトで照らすと繊細さが際立ちます。本物の羽をよく見るきっかけになりますように！

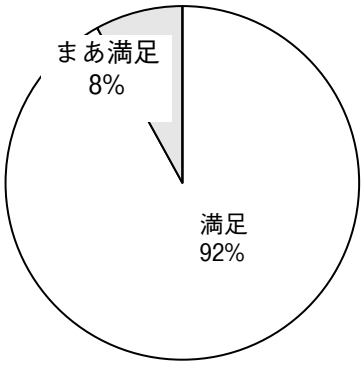
２－３　活動を終えて

２－３－１　参加者の反応

資料２に環境学習センターによる総括・評価、および参加者(保護者)に依頼したアンケート結果の一部を示す。概ね良い評価をいただいた。

資料２　親子で楽しく自然体験in環境学習センター　参加者へのアンケート結果

<table>
<tr><td rowspan="2">参加者の反応・アンケート結果より</td><td>Ｑ１）　講座内容はいかがでしたか？
 

Ｑ２）　スタッフ対応はいかがでしたか？
 
</td></tr>
<tr><td>・自然に接する事ができ楽しかった。虫が苦手だった娘もとても楽しめて良かったです。
・なかなか親子で自然遊びすることがなかったので、とてもいい経験ができました。季節を感じることもできてとても良かったです。
・是非またこういった企画があったら参加したいです。スタッフの方々も皆、親切に接していただき子どもも楽しそうでした。</td></tr>
</table>

２－３－２　学生の様子

表２に参加した学生の感想等を示す。コロナ感染対策のため、やや離れた位置から参加者への補助を行う旨を伝え、この方針で対応したが、参加者側は近い距離での対応を望む場面が多々あり、学生が戸惑った様子であった。

表２　参加学生の感想（抜粋）

行事に参加した感想
・虫取りが終わって次の活動に移る時になかなか捕まえた虫を逃さなかった子どもにたいして親がしっかりと納得するように説得していた。 ・クラフトでは、子どもの好きなように作る様子を見守る保護者もいれば、一緒になって作る保護者もいた。 ・虫とりの時に始めは保護者から離れず、虫とりあみで捕まえることが出来てもパックに入れられないといった子どもの姿が見られた。 ・子どもが虫を触れないため、意を決して触ったと言う方（保護者）もいた。 ・虫について詳しい父親と虫博士であるサークル長と語り合う姿から、本当に虫が好きなことが伝わってきた。 ・虫に興味を持ち臆せずに虫を取る子どもの姿が印象的だった。取れた虫を見せてくれたときの顔がとてもキラキラしていて可愛らしかった。 ・前回の行事も出ましたが同じように緊張した。しかし子どもたちの楽しそうな様子に緊張が解かれ、保護者の方とも子どもとも沢山コミュニケーションを取ることができました。 ・カマキリの餌と言って、アリをジップロックにいれて潰す子どもがいた。命に差があった。

学生自身が学んだと思う事柄について
・前回の行事よりも参加者の方と交流できたことが嬉しかった。周りの状況を常に見て、流れの速さ、参加者の反応等を見ながら調節することを学んだ。 ・自然という環境の中で保護者から少しずつ離れて、虫に夢中になって追いかけたりとったり、する子どもたちの姿が見ることができた。学生スタッフや他の子どもとも交流しながら一緒に虫を見つけてはとったり、「私がとったの！」と見せ合っていたり、視野が広がったことで人との交流も深まったのだと感じた。 ・今回のイベント以外にも保育者になった時、保護者からご指摘を受けることもあると思う。その時の対応をどうするのか、落ち着いて、保護者の気持ちに寄り添った対応ができるようになりたい。 ・虫が苦手な保護者に（採取した虫を）パックに移動するようお願いされた。私もあまり虫が得意ではないが、実習に行った先でも同じことがあると思い、頑張ってパックに移動させた。 ・子どもと同じ目線で会話することで楽しさや面白さを共有しやすくなり、気持ちや行動理解に役立てることが出来た。 ・保護者の自然への意識や関わり方が子どもに与える影響の大きさを理解した。子どもと関わるだけでなく、保護者とも良い関係を築くことが子どもがより行動しやすくなると学んだ。 ・後輩の子のサポートや他学生との連携が、イベントをスムーズに進め楽しいものにすると実感した。子どもの笑顔は宝だと思った。

３ 「親子で楽しく自然体験in環境学習センター１月」の実施

３－１　実施の概要

実施の概要を表３に示す。今回はリピーターが多く、本行事が定着しつつあることが伺える。

表３　行事実施の概要

実施日時	2022年１月21日（土）10：00－12：00
実施場所	クリーンパーク茂原東側林地、環境学習センター４階
学生スタッフ	４年：建 優寧、大槻 友里、長野 亜由美、河又 未来 ３年：海野 史帆、立川 ひかり、生出 梨紗 ２年：根本 桃華（統括）仲山 日菜（統括）、坂本 有偉 １年：山本 侑奈、天谷 優里
プログラムの内容	①生き物文字あわせ　②冬越しの生き物　③製作（バードコール、ロウソク、クレヨン）
下見	１月11日（火）15：00～16：30　学生３名参加
参加者数	39名（保護者20名、子ども19名）

３－２　活動の様子

活動の様子を資料３に示す。今年度、屋外での生き物探しは虫に詳しい学生による「観察会」の方式をとった。すなわち、参加者が自由に生き物を探し、それらに対して簡単な解説を行う形式である。屋内での制作は、みやの環境創造提案実践事業（宇都宮市）で取り組んでいる「虫の生活への利用」をテーマとした。今年度は「ミツロウ」をとりあげ、ロウソクやクレヨンづくりを行った。３つのコーナーを自由に回って制作するスタイルとした。参加者は各自のペースで制作を楽しんでいた。

資料３　活動の概要（バーベナのサイトより）

宇都宮市環境出前講座「親子で自然体験　in　環境出前講座」を実施しました。

最初にアイスブレイクとして「いきもの文字あわせ」。学生さんの背中に貼ってある「もじ」を読み取ります。学生さんたちは逃げ回ります。文字を貼っていない学生さんも一緒に逃げて、撹乱します。全部の文字をつなぎ合わせると「みのむし」になりました。

体が暖まったところで、「冬越しの生き物さがし」今回は自由に探していただき、見つけたものに対して解説をさせていただく方式としました。落ち葉だまりからはガの仲間やダンゴムシが。木の幹にはジョロウグモの卵等が貼り付いていました。

後半は室内に移動し、３種のクラフト体験です。１つめは「みつろう・キャンドル作り」。タコ糸に溶かしたミツロウをしみ込ませて芯をつくり、これにミツロウシートを巻くだけの簡易版です。２つめは「バードコール作り」。穴を空けたヒノキとシラカバの木にアイボルトをねじ込むだけです。選んだ木によって音の違いがありました。３つ目は「ミツロウ・クレヨン作り」。ミツロウと米油、コーンスターチを混ぜ、ここに選んだ色を入れて混ぜ、加熱して型に流し込みます。今年度の活動はこれで終了。参加くださった皆様、環境学習センターの方々には大変お世話になりました。

○いきもの文字あわせ

学生さんは背中に貼った文字を隠しながら逃げます。隠すために落ち葉に潜った学生さん。「じゃんけんで私に勝ったら起きてあげる」

○冬越ししている生き物さがし

目が慣れると次々と見つかります。寒くて凍えていた「ガ」。

○ミツロウキャンドル作り

ミツロウはミツバチの巣材です。働きバチの脇腹あたりにある腺から分泌されます。

○バードコール作り

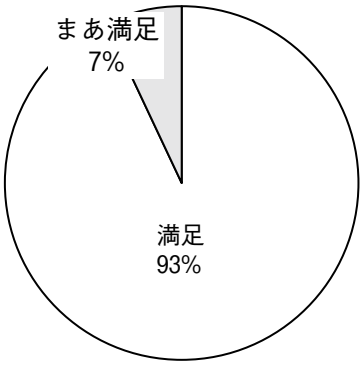
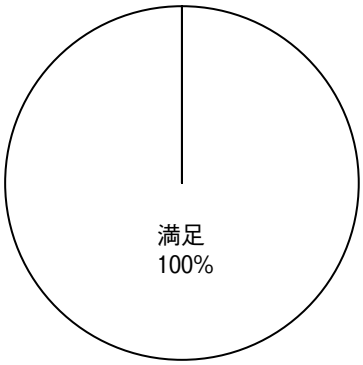
木は「卵型（ヒノキ）」と「枝（シラカバ）」を用意。松ヤニは自家製？！

３－３　活動を終えて

３－３－１　参加者の反応

資料４に環境学習センターによる総括・評価、および参加者(保護者)に依頼したアンケート結果の一部を示す。概ね良い評価をいただいた。

資料４　親子で楽しく自然体験in環境学習センター　アンケート分析および評価

<table>
<tr><td rowspan="2">参加者の反応・アンケート結果より</td><td>Ｑ１）　講座内容はいかかでしたか？
 
</td><td>Ｑ２）　スタッフ対応はいかかでしたか？
 
</td></tr>
<tr><td colspan="2">・ミツロウを使った製作が楽しかったと子どもが言っていました。屋外活動と屋内活動の両方が入ったプログラムは良いと思います。今後も機会があれば参加したいと思います。
・子どもも楽しかったと言っていました。ありがとうございました。
・とても楽しかったです。（去年も参加しました。）
・大学生の皆さんが物知りですばらしい。</td></tr>
</table>

３－３－２　学生の様子

表４は行事に参加した学生の感想（抜粋）である。屋外で実施した活動では、この時期の行事を数回経験している上級生は、積極的に落ち葉で遊んだり、ゲームを盛り上げる姿を見せ、下級生もそれに倣うような動きを見せていた。生き物の観察ではスタッフの学生も参加者に混ざり、解説を一緒に聞く姿があった。室内では時間を見つけて自分たちも制作をするなど、のびのびとした様子がみられた。

表４　参加学生の感想

参加した感想
・冬の生き物が、こんなにも見えるところにいるとは驚きだった。 ・「蜘蛛は音がサカサカすることが気持ちが悪い」。「ダンゴムシは手のひらで歩いている感触が気持ちいい」との事、子どもは視覚以外から沢山の情報を得ていると感心した。 ・自分が想定していたよりも熱心に虫を探す様子が見られた。 ・生き物たちは冬でも意外と近くで起きていることが分かり、驚いた。女郎蜘蛛の卵の小ささに思わず釘付けになってしまった。 ・室内での活動の際には、子ども達が一生懸命に作っている姿を見ることができた。この活動で感じたことを他のことにも使えたら良いと思う。 ・活動の流れが焦らずのんびりした雰囲気で流れていて良かった。また落ち葉が豊富でサクサクとした音やヒラヒラ舞う様子に子どもたちが嬉しそうだったのが印象的だった。

今後に向けて
・虫についてもっと紹介出来ると良かったと思う。 ・（バードコールで）卵型の木は子どもには持ちにくいため、「ひと家族１個」としたが、人気だった。アイボルトが短かったため、抜けてしまったり回しすぎて穴が開き過ぎた親子もいた。松ヤニが固まったのは予想外でとても焦った。コツはあるが思っていた以上に大人も子どもも楽しめる製作だと思った。 ・製作では保護者が作りたい・やってみたいという意欲を強く持ち、活動に積極的な家族が多かったように感じた。 ・QRコードの読み取りが出来ていない家族も見られた。今後も使うのであ－れば何か対応策があると良いかもしれない。 ・今回はほとんど参加者として活動してしまった。次回は支援者として活動したい。 ・作ったあと、自分のものだとわかるように名前を貼れるようにした方がいいと思った。

４　おわりに

今年度も「みやの環境創造提案・実践事業」で考案したプログラムを、行事の中で実践する形となり、その内容を多く取り入れた内容になった。

本活動の集客は市の広報を利用しており、幅広い層へ行事開催の情報を伝えることが可能である。これは、多くの親子と共に自然を楽しみたいという本団体の目的と一致しており、理想的であった。しかし、今年度はリピーターが多く、今後も増える可能性もある。この利点もあるが、プログラムのマンネリ化を避け、参加者を飽きさせない工夫が必要になる。

新型コロナウイルスの感染状況も落ち着き始め、今後はコロナ前の状況に戻りつつあるが、ここ数年の行動制限の影響により子どもたちや学生の実体験の減少が指摘されている。本活動がその解消の助けとなることを願っている。

Ⅵ－４－①．宇都宮共和大学・宇都宮短期大学×ミナテラスとちぎ

「大学連携親子ワークショッププログラム」実施報告

「自然を感じよう～アロマワックスバー作り」

子ども生活学部　教授　桂　木　奈　巳

活動の概略

１．日　時：５月22日（日）10時30分～11時30分
２．場　所：ミナテラスとちぎ（宇都宮市インターパーク６－２－１）セミナールーム
３．参加者：子10名（２歳児２名、３歳児３名、４歳児４名、５歳児１名)、保護者11名
４．担当教員（現地）：桂木、高柳
５．参加学生：学生５名（４年生）河又未空、大槻友里、建優寧、
　　長野亜友未、金子花菜　合計29名
６．コロナ対策：参加学生は２週間前より検温等の健康管理。
　　当日はソーシャルディスタンスを配慮した環境構成、活動開始・後のアルコール消毒の実施。大人はマスク着用。

活動の内容

１．内　容：テーマ「自然を感じよう～アロマワックスバー作り」
　自然素材を使い、親子でアロマワックスバーを２種類制作した。

２．事前準備
　計４回集合し、打ち合わせと事前準備を行った。材料等は学生が分担して運搬・搬入した。
３．当日のスケジュール
　９：00～　　現地集合、抗原検査のち準備
　10：15～　　参加者受付・入室
　10：30～11：20　制作
　11：20～11：30　まとめ、アンケート、閉会
　11：30～　　掃除・片づけ
４．その他
　・現地で学生と教員に昼食弁当配布あり。

活動の様子

４年生の卒業研究の実践として実施した。子どもたちは入室時から机上に並べた材料に興味を示し、制作も予想以上に集中していた。保護者も制作したくなることを想定し、２個分の材料を用意したが、実際には２個とも子どもが作っていた。使用する「香り」は４種用意したが、子どもと保護者の会話から、選ぶ種類がはっきり分かれているようであった（子どもは「知っているもの（オレンジやバラ）」を、大人は効能で選ぶ様子であった）。ワックスバーのデザインは女児はきれいにまとめようとし、男児は立体的に造形する傾向があり、興味深かった。保護者は制作に手を出しすぎず、子どもの意思を尊重して補助をしていた様子が好ましかった。学生の手際も連携も良く、子どもの作品を褒め、保護者にも丁寧に接していた。仕上がった作品はどれも華やかで見栄えがした。

制作が終わった子どもには、自然物から作った「絵の具」の試し描きをしてもらった。

Ⅵ－４－②．宇都宮共和大学・宇都宮短期大学×ミナテラスとちぎ

「大学連携親子ワークショッププログラム」実施報告

「つくってあそぼう！　－身近な素材でつくって遊ぼう－」

子ども生活学部　准教授　市　川　　舞

活動の概略

１．日　時　　令和４年９月25日（日）10：30～11：30

２．場　所　　ミナテラスとちぎ　セミナールーム（宇都宮市インターパーク６－２－１）

３．参加者　　子ども10名、母８名、父１名、子ども生活学部学生８名、教員２名　合計29名
（２歳２名、３歳１名、４歳５名、５歳１名、７歳１名）

４．コロナ対策　参加学生は２週間前より検温等の健康管理。当日朝の抗原検査実施。活動開始・後の消毒の実施、ソーシャルディスタンスに配慮した環境構成、大人はマスク着用（教員・学生は白マスク）

活動の内容と進め方

１．内　容　　テーマ：つくってあそぼう！　―身近な素材でつくって遊ぼう―
身近な素材（空き容器、毛糸、毛筆など）を用いた「ぱくぱく」「ぬう」「かく」

２．現地担当教員　市川、今村

３．参加学生　　大下千鶴、黒須彩夏、田野井悠莉、石崎佳澄、大塚菜実、片岡結希乃、三浦栞、大島菜月

４．当日のスケジュール

時間	流れ	
９：00	現地集合	環境構成、準備
10：15	参加者受付開始	
10：30～11：20	ワークショップ １）縫う、２）ぱくぱく、３）かく	
11：25～11：30	閉会、アンケート	
11：30～	参加者解散	
11：45～	片付け、学生・教員解散	

５．その他

・現地でミナテラスより学生に昼食（弁当）配布

活動のふりかえり

空き容器で「ぱくぱく」の工作、毛糸で「ぬう」、毛筆・たんぽで「かく」を楽しむ活動を提案した。手仕事が中心だったため、参加児の保護者は「幼児には難しいのではないか」という思いを抱いたようだったが、やりたい！と意欲的に集中して活動に取り組む子どもの姿を目にして、驚きを覚えていた。

保護者の方からは、「家庭でも手軽に取り入れることができる遊びばかりで、家庭でもやってみたい」「作って終わりではなく、作っていろいろな遊びに活かせるので楽しみが広がる」「縫うことは子どもには難しいと思っていたが、こんなに集中して行うとは発見だった」などの声が寄せられた。

また、学生にとっては、日頃の教材研究の成果を地域の子育て家庭に楽しんでいただく、よい機会となった。

Ⅵ－４－③．宇都宮共和大学・宇都宮短期大学×ミナテラスとちぎ「大学連携親子ワークショッププログラム」実施報告

「親子リトミック」

子ども生活学部　専任講師　大　島　美知恵

１．はじめに

リトミックは日本においては幼児教育、療育、地域の子育て支援事業等の中に広まりつつあり、また「習い事」としても楽器を習う前の音感教育として普及してきている。この親子リトミックの活動は企業の地域コミュニティ施設と連携し、年３回のペースで２年間、２歳～５歳の親子を対象に行ってきた。リトミックの活動を通して地域の親子と学生たちとの交流を推進し、その交流によって親子共々楽しめる場となること、学生にとっては地域の親子に対する関わりを通して、保育者としての視点を学ぶ場となることを目的としてきた。

２．活動概要

（１）　日　時

2022年７月24日（日）

2022年11月20日（日）

2023年２月５日（日）

10：30～11：15 ワークショップ　11：15～11：30 ミニ講座・絵本の読み聞かせ

（２）　会　場：ミナテラスとちぎ（宇都宮市インターパーク６－２－１）セミナールーム

（３）　対象者：２歳～未就学児をもつ家族（父親・母親・子ども）

親子合わせて20名程度

（４）　参加募集と受付：栃木トヨタが窓口

（５）　参加学生：毎回３～４年生を中心に７～８名ほどの学生が参加した。親子遊びの会Tiny（障がいのある子どもと家族のためのあそびの集い）のメンバー、音楽療法科目の履修者など、音楽や子どもとの関わりに興味があり、積極的に取り組んでいる学生に呼びかけて参加を募った。

３．活動の内容

（１）　各回のテーマ

７月24日「いろんな音と動きで遊ぼうリトミック」

11月20日「親子でつくるリズムや歌のリトミック！」

２月５日「親子でふれあい、ほんわかリトミック！」

（２）　事前準備

毎回４～５回の打合せと練習を行った。

第１回：企画・担当決定

第２回：ワークショップの流れを確認、学生担当部分の練習
第３回：教材製作
第４回：ワークショップの流れを確認、学生担当部分の練習
第５回：最終打ち合わせ

（３） 当日のスケジュール

９：00　現地集合、抗原検査実施
９：30　会場の設営と準備
10：15　参加者受付
10：30　ワークショップ開始
11：15　保護者向けミニ講座（教員）絵本の読み聞かせや遊び（学生）
11：30　終了、参加者は解散。掃除・片づけ
12：00　学生・教員解散

４．活動の様子

各回共に季節の風物詩を題材とし、視覚教材を入れたパネルシアターや身体活動、楽器活動を行った。これらの活動を通して、リズム・音の高低・ニュアンスなどを感じ取り、親子それぞれの表現を楽しんでいる様子であった。入室時には緊張した面持ちの子どもたちも身体を動かしていくことで、笑顔になることが多かった。

学生たちは、ワークショップではアシスタントとして教具の配付や動きのモデリングを行い、保護者がミニ講座を聴いている間には、子どもたちに絵本の読み聞かせや遊びの提供を行い、主体的に活動できていた。常に笑顔で積極的に関わっていた。

５．保護者アンケート

子どもがとても楽しそうに活動できていた。子どもだけではなく、親も一緒に楽しめた。大人だけの教室よりも、学生さんがいることで雰囲気が良い。などの感想を頂いた。今後、開催回数が増えることや、乳幼児対象のリトミックを希望する声があった。

６．学生アンケート

リトミックを通した親子の関わりを観察することで、同じ活動であっても親子それぞれに反応が違うことを学ぶことができた。子どもだけではなく、親子に接することで新たな保育士と視点を得ることができたという意見が多かった。また親子が楽しんでいる姿を見て、自分もとても楽しかった。との意見もあった。

７．まとめ

リトミックの活動を通して、親・子・学生が共に楽しみ、学び合う時間になっていたことが伺える。今後はコロナ感染対策の緩和を視野に入れ、親子同士の交流にも重点をおいた活動を考えていきたい。また保護者の希望にあった乳幼児対象の活動も検討していきたい。

Ⅵ－４－④．宇都宮共和大学・宇都宮短期大学×ミナテラスとちぎ「大学連携親子ワークショッププログラム」実施報告

「作ってあそぼう　お正月遊び」（第48回親子遊びの会）

子ども生活学部　准教授　今　村　麻　子

活動の概略

１．日　時：12月11日（日）10時30分～11時30分

２．場　所：ミナテラスとちぎ（宇都宮市インターパーク６－２－１）セミナールーム

活動の進め方とタイムスケジュール

１．内　容：テーマ「お正月遊び」
こまやお正月の飾りなど身近な素材を使って親子で楽しむ手づくりコーナー、
親子のふれあい遊び、段ボールでできた臼と杵を使ってみんなでお餅つきなど

２．参加者：親５人　子７名　＋　学生８名　＋　教員３名　　合計23名

内容は別頁「Ⅳ．親子遊びの会－子育てネットワークプロジェクト－実践報告」に掲載する。

Ⅶ．宇都宮共和大学子ども生活学部　卒業研究

Ⅶ－１．2022年度卒業研究一覧

天谷　朱里	ＬＧＢＴの理解を促す絵本
新井　茉緒	ディズニーリゾートにおける魅力
石川　美郁	インクルーシブ保育における子どもへの関わり
石﨑　佳澄	家庭における身体活動と阻害時間の関係性についての一考察
岩瀬　　葵	子どもの褒め方・叱り方－怒らない保育とはなにか－
大下　千鶴	遊びで使える仕組み－「ぱくぱく」の仕組み－
大島　菜月	中世・近世ヨーロッパの子どもの暮らしと子ども観の変遷
大塚　菜実	地域の福祉タクシーの現状と課題
大槻　友里	自然を使った教材づくり
岡部　偲穏	支援者としての対人能力についての一考察
笠倉　俊輔	金融リテラシーとキャッシュレス化の因果関係
粕谷　相吏	子どもから大人への感受性の変化
片岡結希乃	日本の衣服の変遷
金子　花菜	ドラムサークルの可能性とそれを取り入れたコミュニティー音楽の実践
亀田　貴文	子どもの身体能力や意欲と家庭環境との関係性
河又　未空	子どもと香りに親しむ
久保　大樹	援助困難事例から分析する子ども一人ひとりの「ストレングス」と支援者の気づきについて
黒須　彩夏	書道の魅力について
小沼　未歩	若者の金銭事情調査～時代と共に進化する消費方法～
小松　渚美	積み木の魅力～ＫＡＰＬＡの実践を通して～
小松　優花	ディズニーソングの特徴を活かしたこどものうたづくり
齋藤　大貴	和楽器を保育に取り入れる利点とは
佐藤　美優	映像から観た日韓アイドルの異なる点、共通点
篠原　唯花	子どもと関わるアルバイトで学生が得られるもの
柴山　奈央	乳児の保育室内における環境及び玩具の汚染と効果的・効率的な管理法について
鈴木　晴美	スタジオジブリ作品の魅力
髙橋　陽菜	女性の体形に対する考え方とダイエット行動の実態
髙橋実由奈	お酒の上手な嗜み方
髙村カンナ	若年層母親に関する研究～必要とされる支援とは～
建優　　寧	身近な植物の活用方法～「織る」を中心に～
田野井悠莉	「縫う」を身近に
土屋向日葵	若者のファッション文化

永井　　綾	惹かれる言葉選び
長野亜友未	虫の面白さを伝える活動
橋本　実咲	子どもの睡眠と音楽－子守歌が睡眠に与える効果－
針ヶ谷秋奈	音楽について
広木　　由	カプセルトイは何故人々に愛され続けるのか
福本　柚香	メディアの発達による韓流ブーム
藤田　智尋	耳が聞こえなくても楽しめる音楽
細井　　蓮	差別のないサッカー指導
松本　歩夏	オーストラリア短期語学留学の効果～異文化の中の気づき～
丸山未里有	伝承遊びを楽しむための保育の在り方
三浦　　栞	子どもの貧困はなぜ改善されないのか
御子貝蓮香	こどもホスピスの現状
矢口　茉弥	子どもと音－絵本に音楽を組み合わせた効果－
山口　玲奈	ぬいぐるみの癒し効果について

Ⅶ－２．全国保育士養成協議会関東ブロック協議会　第36回学生研究発表報告

主催：全国保育士養成協議会関東ブロック協議会
日程：2023年２月17日（金）
会場：植草学園大学（オンライン配信拠点）

「自然物を使った画材の作成と実践活動」
宇都宮共和大学　子ども生活学部４年　大槻友里
指導教員：桂木　奈巳

Ⅶ－２．全国保育士養成協議会関東ブロック協議会　第36回学生研究発表報告

自然物を使った画材の作成と実践活動

大槻友里
（宇都宮共和大学　子ども生活学部　子ども生活学科　４年）

1.　目的

ここ数年、「持続可能」をキーワードに様々な活動が各地で活発に取り組まれている。そのうちの１つである環境に関する課題も重要であり、幼少期から自然に親しみを持ち、自然と適切につきあう方法を身に着けることがSDGsの達成にもつながるだろう。

自然の恩恵を身近に感じる方法は様々あるが、筆者は「自然物の美しい色」に着目した。自然界にある多くの生物には固有の「色」があり、さらに同じ種でも季節や場所等により色が変化する。昔から人はこの自然界にある色を使って布を染めたり、絵を描いたり、「色」を使って自分たちの生活を豊かにしてきた。私たちの身の回りにある「色」は、本来は自然由来であるが、このことはあまり意識されていないようである。

そこで、自然本来の「色」を子どもに身近に感じてもらうことで自然の恵みを伝えたいと考えた。これらの色をそのまま手元に置く方法として、「画材」と「自然物」を組み合わせることを考えた。特にクレヨンや絵の具などは子どもが初めて持つ画材であり、親しみがある。市販品にも自然物を着色料として使用している製品があるが、その原料への気づきは少ないと思われる。そこで、本報では実際に自然物から画材を作成する体験を通して、自然に興味・関心を持ってもらうことを目的とした。

2.　画材の作成

(1)　植物色素の製作

岩石等を粉末にして、「色」を得る方法に準じて、植物を粉末にして用いることにした。様々な方法を試したが、得られる粉末の粒子がより細かい方が画材ベースに混ぜた時の仕上がりが良い。シリカゲルに植物を入れて急速に乾燥させた後に、ミルで粉末にし、フィルター（約0.1mmのナイロンフィルター）で濾して得る方法がもっとも質が良く簡易であった。

使用した植物は身近に入手しやすく色がはっきりしているバラ、アジサイ、ウコン、ヒノキ等である。以降、本報ではこの方法で作成した粉末を「植物色素」と呼ぶ。

(2)　水彩絵の具

水彩絵の具は、コーンスターチを主原料とした配合と、比較のためメディウムを使用した二種類の水彩絵の具を試作した。これらのベースに植物色素および比較のため、天然由来の食用色素を入れた時の発色や書き心地の違い等を調べた。

その中でも赤いバラの植物色素には他と異なる現象が見いだされた。すなわち、メディウムに色素を混ぜると赤色から紫色となったが、コーンスターチベースに混ぜると、青色になった。そこで原料のpHを測定したところ、メディウムは酸性(pH4.5)、コーンスターチベースは中性(pH7.2)であり、赤バラ色素はpHの変化により色が変わる性質であることがわかった。さらに、絵の具は液体の状態よりも、画用紙に描いた方が色が維持されやすい。赤バラ-コーンスターチベースの絵の具は退色すると青から緑系となり、最終的には黄色味を帯びるように変化した。同じ水彩絵の具でも、原材料の違いにより、異なる特徴が見いだされた。

(3)　フィンガーペイント用絵の具

フィンガーペイント用絵の具では、ヤマト糊、小麦粉、粉末せんたく糊を原料とした、3種のフィンガーペイント用絵の具を試作した。これらに植物色素を加え、色や質感等の比較を行った。その結果、ウコンの植物色素をヤマト糊に混ぜると黄色になったが、せんたく糊に混ぜるとオレンジ色になり、ベースの原料の違いにより、異なる色味になった。ベースのpHはヤマト糊は酸性で、せんたく糊はアルカリ性であった。水彩絵の具と同様に、植物色素はその成分とベースのpHの組み合わせで色が変化する種類があることが分かった。

子どもと実践することを想定し、活動中に五感で素材を感じるために、植物のにおいや色を最大限に活かせる「ベース」と「植物」の組み合わせを選定した。その結果、無臭のせんたく糊は植物独自の匂いを反映させやすい。さらに植物色素とも混ざりやすく、発色が良いことや、書いたときに糸を引くといった感触の面白さがあり、本研究の目的に沿った画材といえる。

(4) 粘土

粘土では、牛乳パックから得たパルプに２種の鉱物を加えてベースを作り、ここに植物色素を数種を加えて試作した。このうち、バラとウコン、クチナシを入れた粘土は、粘土乾燥後も色が保たれ、ウコンとクチナシは匂いも感じられた。手づくりした粘土は、乾くと粘土に混ぜた植物色素の色が変化し、市販の色にはない、自然物特有の変化を感じられる教材となった。

さらに、作れる色を増やしたいと思い、青色の粘土の試作を試みた。バタフライピーや藍、クサギの実等、青の色素を持つ植物を煮出して青色の液体を抽出し、その液体を粘土に混ぜた。その結果いずれも薄い色であり、自然界で手に入りにくい青色を、画材にすることの難しさを感じた。

(5) クレヨン

クレヨンでは、ミツロウと数種の油分を混ぜて加熱して溶かして作ったベースに、植物色素を入れる方法で作成した。まず、油分については、書き心地よりも色素との相性で選択する必要があった。たとえばカシスやムラサキイモは加熱すると色素同士が凝固して、ベースに均等に混ざりにくい。使用した油分の中では、無色の米油で作成したクレヨンは植物色素の色が鮮やかで、色素が沈殿せず均等に混ざり、クレヨンづくりに適していることが分かった。植物で作った手作りのクレヨンは、植物のにおいを感じられるものもあり、五感のうちの触覚だけでなく、嗅覚も使うクレヨンができ、嗅覚の発達を促進する効果があるといえるだろう。

3. 画材を使った実践活動

(1) 水彩絵の具で描く（親子対象）

実践では、材料の安全面と植物色素との色の鮮やかさなどの理由から、コーンスターチで作った水彩絵の具を採用した。行事内*1で筆者が作成した水彩絵の具を体験できるコーナーを作り、親子に体験してもらった。子どもは自由に絵の具を使って画用紙に描き、市販の絵の具と変わらない様子で楽しそうに絵を描く姿が見られた。親しみのある画材であるため抵抗なく使ってもらえたのだと感じた。この活動中に植物色素について話すと保護者も興味深そうに話を聞いてくれた。

(2) 粘土づくりの実践（大学生対象）

大学生30名を対象に「紙粘土で作るペン立てづくり」の実践を行った。すなわち、粘土ベースを製作し、ここに用意した２色の植物色素(クチナシとバラ)のうち１色を選んで着色し、空のヤクルト容器に粘土を塗りつけるという内容である。

活動の最後に、粘土を作った感想や自然物のイメージ等を調査した。粘土づくりをする前に、筆者が植物色素に関する話題を出したところ、強い関心を引いた。さらに、色を選択する際にも、植物色素に興味・関心を持ったようだった。アンケート結果より、「自然物から抽出し色を付けていることが良かった」「自然なものについて考えるきっかけになった」「身近な自然に関わる機会になった」との感想があり、自然を意識できる活動になったといえよう。粘土の感触も良く感じられたという意見が多く、五感を使う活動になったといえるだろう。

(3) クレヨンづくりの実践（親子対象）

親子 41 名を対象に自作のクレヨン作りの実践を行った※2。活動内容は、用意したミツロウと米油を入れた紙のカップに、炭・ニンジン・抹茶・ムラサキイモの４つの粉末のうち１色選んでもらった。そしてよく混ぜて、ホットプレート上で溶かし、型に流して、冷やし固まったら完成とした。活動前に興味を持ってきてくれた子に「炭はどんなにおいがするかな？」等色素に興味・関心が向くような声掛けをした。すると、全ての粉末に鼻を近づけ嗅ぐ姿が見られ、色素に対しての興味・関心を高めることができたのではないかと考える。さらに固めるための冷却中に、何回も触って「まだ柔らかい」「まだ温かい」等、触覚を使って感じ取っていた。活動の最後には主に保護者に感想を書いてもらったが、「ミツロウを溶かす作業が楽しかった」という意見がたくさんあり、子どもが積極的に活動できる教材になっただろう。また、視覚だけでなく、嗅覚、触覚にも働きかける教材だといえるだろう。

4. おわりに

以上の植物色素を用いた実践活動は植物に興味を持つきっかけになったといえるだろう。植物色素を加えた画材づくりを通して、五感を育み、自然への興味・関心の促進にも繋がったといえるだろう。自然由来の色素は四季によって得られる種類が様々であり、色そのものの経時変化も楽しめる。幼児期にこの良さに触れ、植物に興味を持ち、感覚を豊かにしてほしい。

※1　宇都宮共和大学-ミナテラスとちぎ「大学連携親子ワークショップ 2022/5/22」の行事内で実施

※2　「親子で自然体験 in 環境学習センター2023/1/21」内で実施

資　　料

Ⅰ．2022年度子育て支援研究センター事業報告

１．主催事業

（１）子育て支援研究センター公開講座

第37回　　６月25日（土）
あそぼう！－「遊ぼうカー」－の実践から
参加者38名

第36回　　10月30日（土）
脳の発達を聞いてみよう　０歳からの幼児教育
参加者27名

（２）地域の就学前施設との交流を取り入れた保育者養成事業

１）認定みどりこども園　来校型交流保育
第１回　　６月15日（水）　　年長50名
第２回　　１月27日（金）　　年長50名

２）認定しらゆりこども園　来校型交流保育
第１回　　６月８日（水）　　年少児40名
第２回　　６月９日（木）　　年少児40名
第３回　　12月５日（月）　　年少児40名　　中止（新型コロナウイルス感染症）
第４回　　12月６日（火）　　年少児40名　　中止（新型コロナウイルス感染症）
第５回　　１月18日（水）　　年少児40名
第６回　　１月25日（水）　　年少児40名　　中止（悪天候）

（３）Ｔｉｎｙ（障がいのある子どもと家族の支援）

１）HPを利用した情報発信

２）SNSを活用した情報発信
・Facebookで各月にあそびの提案、Twitterでの情報発信など

３）ふれあいＴｉｎｙ隊（障がいのある子どもたちとのふれあい遊び）
①７月23日（土）：子ども発達支援センターぴーちの利用者・支援者15名
②２月25日（土）：児童発達支援・放課後デイサービスピースの利用者・支援者／保護者・きょうだい児12名

４）第10回Ｔｉｎｙファミリーコンサート
～障がいがあってもなくてもみんなが楽しい音楽の集い～
日　時：10月９日（日）　14：00～

場　所：宇都宮市サンアビリティーズ
内　容：第一部）エレクトーン演奏／石下有美氏
　　第二部）手作り太鼓で参加型演奏会
参加者：168名（うち子ども36名）

５）彩音祭でのワークショップと展示活動

６）その他
令和４（2022）年度　共生社会とちぎづくり表彰（障害者差別解消部門）受賞

（４）親子遊びの会　―子育てネットワークづくり―
第１回（第46回）　５月７日（土）　本学グラウンド
「忍者ごっこ」　参加者　子ども９名　保護者８名

第２回（第47回）　11月26日（土）　本学アリーナ
「親子フィットネス」　参加者　子ども20名　保護者17名

第３回（第48回）　12月11日（日）　ミナテラスとちぎ
「お正月遊び」　参加者　子ども７名　保護者５名

（５）ミナテラスとちぎ×大学連携親子ワークショップ
１）親子リトミック
第１回（第３回）　７月24日（日）　参加者　子ども10名　保護者10名
第２回（第７回）　11月20日（日）　参加者　子ども10名　保護者11名
第３回（第９回）　２月５日（日）　参加者　子ども10名　保護者10名

２）その他　つくって遊ぼう
（第５回）　９月25日（日）　参加者　子ども10名　保護者９名

（６）卒業生のためのリカレント教育
第37回公開講座後実施　卒業生７名（短大卒業生２名、大学卒業生５名）

２．地域貢献事業

（１）那須塩原市民大学　地域いきいき学部
前期２講座（シテイ１・子ども１）
６月23日（木）　高柳先生「就学前にこれだけは！」
参加者10名

（２）とちぎ子どもの未来創造大学

「アイ（藍）でマイ箸袋を染めよう！」 中止

（３）大学地域連携活動支援事業 「親子遊びの会」

１）学内報告会

１月６日（金）　子ども生活学部１年生50名　対象に実施

講師：認定みどりこども園　園長　保育教諭１名

２）子育てサークルとの共同研修会及び学外研修会

① 6/30、7/21、10/22本学で、学生代表と子育てサークルの代表者、教員で打ち合わせ

② 8/19本学で外部講師（村山久美氏）による「子育てサークルと地域・大学との連携可能性について」の共同研修

③ 8/27本学で外部講師（富田悦子氏）による「親子フィットネス」の共同研修

④ 1/7東京おもちゃ美術館を学生と教員が視察

３）栃木県主催　中間報告会　　10月13日（木）　代表学生２名

４）栃木県主催　年度末成果報告会　　２月６日（月）　代表学生２名

（４）令和４年度大学コンソーシアムとちぎ学生＆企業研究発表会

大学地域連携活動支援事業「親子遊びの会」鹿沼相互信用金庫理事長賞受賞

（５）みやの環境創造提案実践事業（宇都宮市）

「虫とのくらしを豊かに―虫に学ぶ生物多様性―」

・採択プレゼンテーション　５月26日（木）市役所

・中間報告会　11月26－27日（ＪＲ宇都宮駅東口地区「まちびらき」）ライトキューブ宇都宮　大会議室201・202にポスター掲示

・成果報告会　３月中旬、市役所にポスター掲示（１Ｆ市民ホール）および市役所サイトにPowerPoint音声入り原稿の掲載

（６）宇都宮市環境学習センター事業

「親子で楽しく自然体験 in 環境学習センター７月」

７月30日（土）　クリーンパーク茂原東側林地

参加者38名（保護者18名、子ども20名）　学生16名

「親子で楽しく自然体験in環境学習センター１月」

１月21日（土）　クリーンパーク茂原東側林地、環境学習センター４階

参加者39名（保護者20名、子ども19名）　学生12名

（７）親子ふれあいネイチャー事業　NPOうつのみや環境行動フォーラム

11月26日（土）　宇都宮共和大学内　子どもの森・アリーナ

参加者24名（保護者12名、子ども12名）　学生８名

Ⅱ．2022年度専任教員の社会貢献活動（子ども生活学部）

職　位	教員氏名	委嘱の内容		
		名　称	職　位	設置者
学長	須賀　英之	［各種審議会・委員会委員等］		
		栃木県私立学校審議会	会長代理	栃木県
		栃木県公私立高等学校協議会	委員	栃木県
		栃木県文化振興審議会	会長	栃木県
		栃木県文化功労者選考委員会	委員長	栃木県
		とちぎの元気な森づくり県民会議	会長	栃木県
		栃木県信用保証協会外部評価委員会	委員長	栃木信用保証協会
		うつのみや産業振興協議会	会長	宇都宮市
		那須塩原市社会教育委員	委員	那須塩原市教育委員会
		栃木県私立中学高等学校連合会	副会長	
		［団体兼職］		
		大学コンソーシアムとちぎ	副理事長	
		栃木県交響楽団	会長	
		栃木県楽友協会	会長	
		栃木県オペラ協会	理事	
		栃木県文化協会	常任理事	
		うつのみや文化創造財団	理事	
		宇都宮まちづくり推進機構	理事長	
		「よみがえれ！宇都宮城」市民の会	会長	
		宇都宮市中心市街地活性化協議会	会長	宇都宮市総合政策部
		宇都宮大学ステークホールダー会議	委員	
		宇都宮市創造都市研究センター	センター長	
		全国音楽療法士養成協議会	理事	
		栃木銀行	社外監査役	栃木銀行
		あしぎん国際交流財団	理事	足利銀行
		宇都宮みずほ研修会	会長	みずほ銀行

学　科	職　位	教員氏名	委嘱の内容		
			名　称	職　位	設置者
子ども生活学科	教授	河田　　隆	栃木県子どもの体力向上推進検討委員会	副委員長	栃木県教育委員会
			栃木県幼児期からの運動遊び普及検討委員会	委員長	栃木県教育委員会
			（一社）栃木県レクリエーション協会	副会長	（一社）栃木県レクリエーション協会
			公益財団法人宇都宮市スポーツ振興財団	評議員（議長）	公益財団法人宇都宮市スポーツ振興財団
			宇都宮市社会教育委員会	委員長	宇都宮市
			宇都宮市子ども子育て会議	委員	宇都宮市
			栃木県社会教育委員協議会	理事	栃木県教育委員会
			公益財団法人栃木県民公園福祉協会	評議員	公益財団法人栃木県民公園福祉協会
			那須塩原市民大学運営委員会	委員長	那須塩原市
			下野市立保育園民営化移管先法人選定委員会委員	委員	下野市
			令和４年度幼少期の運動遊び指導者指導者研修会（12月・２月　２回）	講師	栃木県教育委員会
			令和４年度運動遊び体験指導者派遣事業体験指導者派遣事業（３園）	講師	栃木県教育委員会
			令和４年度家庭生活支援員養成研修会	講師	栃木県ひとり親家庭福祉連合会
			那須町保育士研修会（２保育園）	講師	那須町こども未来課
子ども生活学科	教授	高柳　恭子	全国健康保険協会栃木支部健康づくり推進協議会	委員	全国健康保険協会栃木支部
			社団法人全国幼児教育研究協会	支部理事	（社）全国幼児教育研究協会
			宇都宮大学共同教育学部附属幼稚園学校評議員会	評議員	宇都宮大学
			さくら学園さくら認定こども園評議員会	評議員	さくら認定こども園
			宇都宮大学共同教育学部附属幼稚園保育を語る会	講師	宇都宮大学
			栃木県保育士部会研修会	講師	栃木県保育協議会
			栃木県幼稚園連合会教育研究大会	講師	（社）栃木県幼稚園連合会
			栃木県幼稚園連合会資質向上講座	講師	（社）栃木県幼稚園連合会
			関東地区　地域活性化研修会	講師	全国認定こども園協会

			全国認定こども園協会ステップアップ研修会	講師	全国認定こども園協会
			鹿沼市保育士研修会	講師	鹿沼市子ども未来部
			鹿沼地区研修会	講師	鹿沼地区幼稚園連合会
			芳賀地区研修委員会研修会	講師	芳賀地区幼稚園連合会
			平石地区市民センター子育て講座	講師	宇都宮市
子ども生活学科	教授	田渕　光与	那須塩原市幼保小連絡協議会	講師	那須塩原市
			「とちぎの幼小カリキュラム接続プロジェクト」	講師	栃木県教育委員会
			塩谷地区幼稚園連合会教員研修会	講師	栃木市幼稚園連合会
			さくら市幼保小連絡協議会	講師	さくら市
			栃木県幼稚園連合会資質向上研修（ECEQ）	講師	栃木県幼稚園連合会
			令和４年度「とちぎの幼小カリキュラム接続プロジェクト」	講師	栃木県教育委員会
			上三川町幼小連携推進研修会	講師	上三川町
			栃木県幼稚園連合会教育研究大会	助言者	栃木県幼稚園連合会
子ども生活学科	教授	蟹江　教子	宇都宮市男女共同参画審議会	委員	宇都宮市
			栃木県独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構 運営協議会	委員	独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構
			栃木県職業能力開発審議会	委員	栃木県
			栃木県男女共同参画審議会	委員	栃木県
子ども生活学科	教授	土沢　　薫	栃木県障害者施策推進審議会	委員	栃木県
			栃木県障害者差別解消推進委員会	委員	栃木県
			栃木県いじめ問題対策委員会	副委員長	栃木県
			宇都宮市社会福祉施設事業者選考専門委員会	専門委員	宇都宮市
			宇都宮市学校問題等対策専門委員会	委員	宇都宮市
			栃木県公認心理師協会	理事	栃木県公認心理士協会
			栃木県公認心理師協会産業委員会	委員	栃木県公認心理士協会
			栃木県公認心理師協会被害者支援委員会	委員	栃木県公認心理士協会
			栃木県スクールカウンセラー活用事業	スーパーバイザー	栃木県教育委員会
			栃木県立特別支援青葉高等学園SC	スクールカウンセラー	栃木県立特別支援学校青葉高等学園
			芳賀地区スクールカウンセラー研修	講師	栃木県教育委員会事務局芳賀教育事務所

			日光地区小学校現職教育教員研修	講師	日光市立大沢小、猪倉小
			公立小学校児童向け心理教育授業	講師	日光市立猪倉小、南原小
			特別支援学校自立活動指導充実事業	外部専門家講師	栃木県立特別支援学校青葉高等学園
			中堅養護教諭資質向上研修	講師	栃木県教育委員会
			家庭教育支援プログラム指導者研修	講師	栃木県教育委員会
			下都賀地区PTA指導者研修Ⅱ	講師	下都賀教育事務所
			壬生町保育研究会保育者研修	講師	壬生町保育研究会
			東京都保育士等キャリアアップ研修	講師	東京都大田区
			中堅幼稚園教諭等資質向上研修	講師	栃木県教育委員会
			家庭生活支援員養成研修	講師	栃木県ひとり親家庭福祉連合会
			県東部地区保育研究会保育士部会研修会	講師	栃木県東部地区保育研究会
子ども生活学科	教授	杉本　太平	日本関係学会	運営委員	日本関係学会
			日本関係学会研修委員会	委員長	日本関係学会
			埼玉県家庭教育アドバイザー養成研修	講師	埼玉県教育局
			那須塩原市市民大学講座	講師	那須塩原市教育委員会
			那須塩原市子ども未来部養成研修	講師	那須塩原市子ども未来部
			日本子育てアドバイザー養成研修	講師	日本子育てアドバイザー協会
			宇都宮市民大学	講師	宇都宮市
			人間関係HRST研究会	会長	人間関係HRST研究会
子ども生活学科	教授	月橋　春美	栃木県キャンプ協会	理事	栃木県キャンプ協会
			栃木県レクリエーション協会	理事	栃木県レクリエーション協会
			宇都宮市冒険活動運営協議会	委員	宇都宮市
			幼児期からの運動遊び普及検討委員会	理事	栃木県教員委員会
			下野新聞KIZUNAスポーツ大賞選考委員会	委員	下野新聞社
			子どもの体験活動サポーター講座	講師	宇都宮市
			運動遊び体験指導者派遣事業	講師	栃木県教育委員会
子ども生活学科	教授	桂木　奈巳	宇都宮市環境審議会	委員	宇都宮市
			宇都宮市環境大学	講師	宇都宮市
			子どもの体験活動サポーター講座	講師	宇都宮市
			第３次宇都宮市緑の基本計画策定懇談会	委員	宇都宮市

子ども生活学科	准教授	今村　麻子	保育士等キャリアアップ研修	講師	埼玉県
			保育実習担当者研修	講師	さいたま市私立保育園協会
子ども生活学科	准教授	星　　順子	栃木県家庭教育オピニオンリーダー研修	講師	栃木県総合教育センター
			鹿沼市子ども・子育て会議	会長	鹿沼市
			おやま市民大学子育てサポーター養成講座	講師	小山市生涯学習課×ポケットの会
			JOCV幼児教育ネットワーク	運営委員	JICA海外協力隊幼児教育ネットワーク
子ども生活学科	准教授	石本　真紀	月の家（宇都宮市要支援児童放課後応援事業）	生活支援	特定非営利活動法人青少年の自立を支える会
			家庭教育支援プログラム指導者研修	講師	栃木県教育委員会
			栃木県要保護児童対策地域協議会調整機関調整担当者研修	講師	栃木県
			栃木県スクールソーシャルワーカー養成研修会	講師	栃木県教育委員会
子ども生活学科	准教授	市川　　舞	宇都宮市都市計画審議会	委員	宇都宮市
			芳賀地区研修委員会研修会	講師	芳賀地区幼稚園連合会
			栃木県幼稚園連合会教育研究大会	講師	（社）栃木県幼稚園連合会
子ども生活学科	准教授	新井　祐子	東京藝術大学同声会栃木県支部	会計監査	東京藝術大学同声会栃木県支部
			佐野クラシックコンサート	実行委員	佐野クラシックコンサート
子ども生活学科	専任講師	大島美知恵	日本音楽療法学会関東支部	幹事	日本音楽療法学会関東支部
			リトミック研究センタ第一支局・第二支局	指導スタッフ	リトミック研究センター第一支局・第二支局
			日本音楽療法学会関東支部栃木大会	実行委員長	日本音楽療法学会関東支部
			日本音楽療法学会スーパーバイザー養成講座	ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ	日本音楽療法学会
子ども生活学科	専任講師	霜触　智紀	令和４年度群馬大学地域貢献事業　障がいのある子どもたちのスポーツ体験プロジェクト	指導者	群馬大学
			令和４年度「幼児期の運動遊び指導者指導者研修会」	講師	鹿沼市教育委員会
			令和４年度「運動遊び体験指導者派遣事業」	講師	鹿沼市教育委員会

Ⅲ．宇都宮共和大学子育て支援研究センター規程

（設置）

第１条　宇都宮共和大学内に宇都宮共和大学子育て支援研究センター（以下,「研究センター」という）を置く。

（目的）

第２条　研究センターは保育・幼児教育・子育て支援分野を中心にした学際的，実証的な調査・研究を行うとともに，地域福祉の向上に資する政策提言を行う。

２　前項の調査・研究の推進によりわが国の保育・幼児教育・子育て支援分野を中心にした理論，政策の発展・向上に貢献するとともに，その成果を本学の教育内容に反映させることにより，本学の教育の充実，高度化を図る。

３　研究成果を地域社会に還元するとともに，地域社会との積極的な交流を図ることにより，地域福祉の向上に貢献する。

（事業）

第３条　研究センターは第２条の目的を達成するため，次の各号に掲げる事業をおこなう。

一　保育・幼児教育・子育て支援分野を中心にした自主研究，共同研究

二　保育・幼児教育・子育て支援等にかかわる受託調査・研究

三　保育・幼児教育・子育て支援関連資料，データの収集，整備

四　保育・幼児教育・子育て支援等にかかわる政策提言

五　保育・幼児教育・子育て支援の人材育成を目的としたセミナー，講座等の開講

六　講演会，シンポジウム，公開講座，研究会等の開催

七　経営等診断，研修，コンサルティング活動

八　大学，研究機関，企業，行政等との交流，連携活動

九　研究年報，研究レポート，Ａ研究成果等の発刊

十　その他第２条の目的達成のために必要な事業

２　前項に規定する自主研究，共同研究及び受託調査･研究は，次の各号に定めるところによる。

一　自主研究　当該研究に携わる研究者の過半数を研究員が占める研究で研究センターの研究費を用いて実施する研究

二　共同研究　研究費の全部または一部を研究センター以外の諸組織，機関等の研究助成を受けて実施する研究

三　受託調査・研究　研究センター以外の諸組織，機関からの委託等を受けて行う調査・研究

（組織）

第４条　研究センターは，子育て支援研究センター長（以下,「センター長」という。）及び教授会から選出された研究員並びに本学学長（以下,「学長」という）が任命する事務職員によって組織する。ただし，事務職員は必要に応じて置くものとする。

２　センター長は, 本学専任教員の中から, 学長が任命する。ただし, 学長が必要と認める場合は, 本学専任教員以外の者を任命することができる。

３　研究センターに，副センター長及び運営委員長を置く。副センター長及び運営委員長は，研究員の中から学長が任命する。ただし，副センター長は置かないことができる。

4　センター長，副センター長，運営委員長及び研究員の任期は２年（年度基準）とし，再任は妨げない。
5　学長，副学長および学部長は，研究センターの事業に関し，指導，助言を行うことができる。
6　研究センターにおける研究に必要な場合，専任教員以外の研究者を客員研究員として研究に参加させることができる。客員研究員は，センター長が任命し，任期は対象となった研究等の完了時を上限とする。
7　研究センターの発展のため，学外の研究者，経営者等に名誉顧問，研究顧問を委嘱することができる。名誉顧問，研究顧問の委嘱は学長が行い，任期は２年とし，再任は妨げない。
8　前項の顧問は研究センター長の求めに応じて，研究センターの事業に関し助言，指導等を行う。

（運営）

第５条　センター長は研究センターを統括し，副センター長はこれを補佐する。
2　研究センターを運営し，諸事業を遂行するため，運営委員会を置く。運営委員会は運営委員長が主宰し，運営委員長が指名する数名の研究員を運営委員とする。運営委員長は運営委員の中から，必要に応じて副運営委員長を指名することができる。
3　研究センターの事業や活動を検討するため，全研究員参加の研究員会議を必要に応じて開催することができる。研究員会議はセンター長が召集し，主宰する。

（運営委員会の業務）

第６条　運営委員会は，研究センターの円滑な運営を図るため，次の業務を行う。
一　各年度の事業計画の策定及び予算原案の作成
二　研究員から提出される自主研究，共同研究及び受託調査・研究の企画書，予算案査定
三　保育・幼児教育・子育て支援等にかかわる政策提言の検討
四　第３条第1項第五号から七号までに掲げる事業の企画，運営，実施
五　研究年報，研究レポート，研究成果等の刊行，発表
六　研究センターの施設・設備，資料等の整備及び管理
七　その他研究センター運営に必要な業務

（予算及び会計処理）

第７条　研究センターの予算は次の収入による。
一　各年度の本学予算に定められた研究センター経費
二　第３条に定められた受託調査・研究等の諸事業による収入
三　寄付金
四　その他の収入
2　受託調査・研究等に関する予算配分・原稿料等の基準については別に定める細則によるものとする。

第８条　予算執行にかかわる会計処理は本学の同規程を準用する。ただし，出張旅費等に　ついては，名誉顧問，研究顧問及び客員研究員にも適用されるものとする。

附　則

この規程は平成31年４月１日から施行する。

Ⅳ．宇都宮共和大学客員研究員に関する要領

（趣旨）

第１条　この要領は，宇都宮共和大学都市経済研究センター規程第５条２及び子育て支援研究センター規程第５条２における客員研究員の取扱い等に関し，必要な事項について定めるものとする。

（称号の付与）

第２条　宇都宮共和大学都市経済研究センター及び子育て支援研究センター（以下「センター」という。）は，優れた知識，技術及び経験を有し，本学の研究・教育の充実発展に資すると認められる者に客員研究員の称号を付与することができる。

（指名）

第３条　客員研究員は，センター長が指名し，教授会に報告するものとする。

（付与期間）

第４条　客員研究員の称号は，年度ごとに付与する。ただし，年度途中の場合は，当該年度内の付与とする。

２　客員研究員の称号の付与期間は１年とし，再任を妨げない。

（施設の利用）

第５条　客員研究員は，学長の許可を受けて本学の施設等を利用することができる。

（遵守事項）

第６条　客員研究員が，本学において研究・教育に従事する場合は，本学の諸規則等を遵守するものとする。

２　客員研究員が，故意又は重大な過失によって本学に損害が生じたときは，客員研究員はその責めを負うものとする。

（謝金）

第７条　本学は，必要と認める場合，客員研究員に謝金を支給することができる。

２　前項に規定する謝金については，別に定める。

（交通費）

第８条　本学の依頼に基づき出張する場合は，交通費の全部又は一部を支給することができるものとする。

（称号の取消）

第９条　客員研究員が，本学の名誉を著しく傷つける行為をした場合は，センター長は客員研究員の称号を取り消すことができるものとする。この場合，教授会に報告するものとする。

（雑則）

第 10 条　この要領に定めるもののほか，客員研究員の取扱いに関し必要な事項は，センター長が別に定めるものとする。

附　則

この要領は，平成 25 年 11 月 1 日から施行する。

子育て支援研究センター運営委員会（2022年度）

センター長　高柳恭子

副センター長　田渕光与

運営委員長　石本真紀

運営委員　土沢薫　杉本太平　星順子　大島美知恵

客員研究員　田所順子　丸橋亮子

名誉センター長　牧野カツコ

第13号編集担当　星順子

表紙デザイン　近江智子

研究センター年報　第13号

発　行　日　2023年３月31日
編集・発行　宇都宮共和大学子育て支援研究センター
〒321－0346
宇都宮市下荒針町長坂3829
TEL　028－649－0511㈹
FAX　028－649－0660
e-mail：kosodate@kyowa-u.ac.jp
Website：http//www.kyowa-u.ac.jp
印　　刷　株式会社　松井ピ･テ･オ･印刷
定　　価　1,000円（消費税込み）

宇都宮共和大学子ども生活学部

子育て支援研究センター公開講座の記録が
装いを新たに、金子書房から出版されました。

人とのかかわりや自然から学ぶことの大切さ

子どもが安心して育つために必要なことを子育て支援の専門家らが提言。
お母さんにまかせきりにしない子育て、幼児期から児童期へのなめらかな接続、発達障害について知っておきたいことなど、いま、保育に求められる子どもの見方・かかわり方がわかる。

金子書房

目　　次

Ⅰ部　子どもの育つ社会・環境を考える

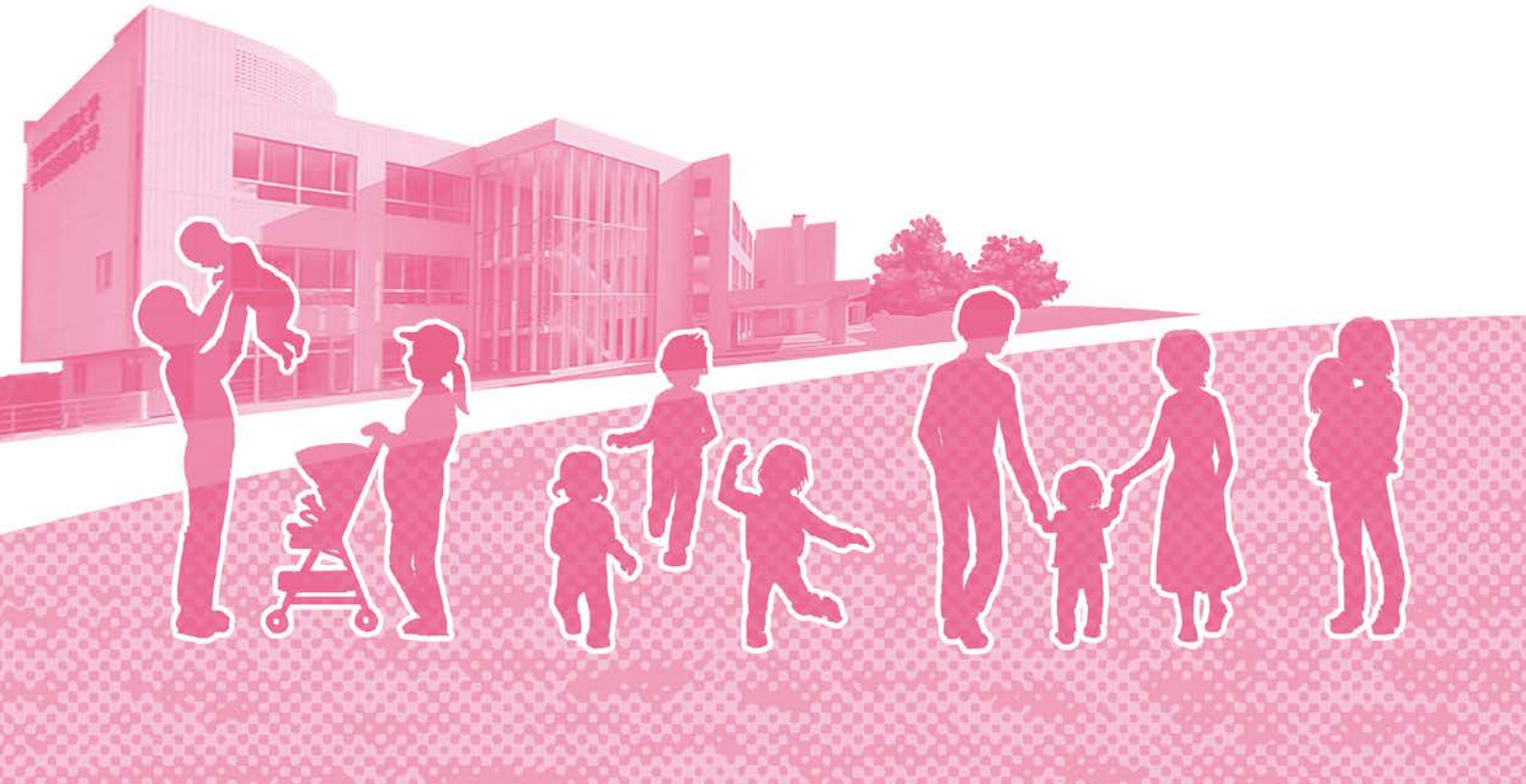
1．子どもへのまなざし
2．子どもの成長と自然
3．子どもが育つ条件

Ⅱ部　子どもを育むかかわり方を考える

4．子どもの創造的想像力を育む親の役割
5．ことばと呼吸と音楽
6．幼児期から児童期への教育

Ⅲ部　気になる子どものケアを考える

7．生涯発達の心の基礎づくり
8．医療的ケアが必要な子どものレスパイトケア
9．気になる子どもと脳科学

定価　　本体 2300 円＋税

表紙の写真は、栃木県那須高原で絶滅が危惧されているウラジロヨウラクというつつじの仲間です。本学名誉教授･元副学長　大久保忠旦先生が花の開花時期を見計らって那須高原に４回も足を運んで撮影されたものです。(本文 35 頁参照)